閑山

かんざん

第4号

金色堂國寶指定100年記念

寺報　中尊寺

目次

尊容は素月のごとし　貫首　千田　孝信　2
寺報ぐらびあ　4
金色堂――昭和の大修理から三十年　小西　暁也　14
歌人のみちのく　馬場あき子　44
金色堂國寶指定百年祭日誌抄　70
金色堂國寶指定百年記念祭　76
金色堂國寶指定百年記念特別寄付　79
金色堂國寶指定百年祭　法要表白文　80
新讃衡蔵の建設　菅原　光中　85
ネパール・チャリコットでの体験　菅原　恵子　88
中尊寺仏教文化研究所『論集』創刊　92
慈覚会　御影供と「べろべろ」　菅野　康純　94
風信／語録　96
［陸奥教区宗務所報］　100
執務日誌抄　101
浄財御奉納者御芳名　112
曼荼羅結縁　114
不動尊祈願　115

〈表紙「関山」貫首染筆〉

尊容は素月のごとし

貫首　千田孝信

秘仏堂のうす暗い空間に入った瞬間、正面の高みに浮びあがったご本尊「一字金輪仏頂尊」の尊容に、参詣客は思わず息をのむ気配である。寺僧の静かな語り口に耳を傾けながらも、眼は釘付けになったように、仏のお姿を離れない。不思議な魅力をもつ仏さまである。なぜか、長い間こころに求めていた尊い存在に巡り逢えたような邂逅の感動がある。

大日輪の中から尊い半身を現わし、師子座・白蓮華の台に坐したまう。五智の宝冠と智拳印に深い智慧を秘め、女身に紛う優美な容色で溢れる慈悲を示し、半眼に見ひらいた眼の奥には、静謐に智慧と慈悲のひかりを湛えておられる。この仏こそ金剛界の大日如来、その広大無辺の悟りは宇宙の法・真理そのものであるがゆえに、あらゆる仏菩薩の悟りと功徳が悉く含まれる最高最勝のみほとけである。「ぼ(ボロン)」の真言の一字には、あらゆる仏菩薩の真言の功徳の威力がことごとく籠められている。

このほど、台密の修法を集成した「阿娑縛抄」という書物をひもといてみた。一字金輪仏頂尊の深秘に関わることが多く誌されているが、なんと、その尊容について、儀軌は「遍照如来身　形服如素月（遍照如来の身　形服は素月のごとし）」と定めているではないか。素月とは、明るい満月の光りをいう。

これだ！これが謎めいた魅力の秘密なのだ。尊容の全貌から受ける印象は、まさに素月、明るい満月の光りそのものではないか。行者の観法の澄みきった心月輪に映ずる一字金輪仏のお姿は、まさに大円相の素月のひかりである。本来は無相の相であるが、無相の智慧の光りを、衆生済度の慈悲の相に化現したまうたお姿なのである。

しかし、「人肌の大日さま」とは、なんと親しみのある愛称であろう。庶民は、体温の温もり、いのちの温かみをもってこの仏の慈愛を感じとった。これがまさに信仰というものなのである。

10月16日東京都会場（有楽町マリオン朝日ホール）天台声明のステージ。中尊寺貫首を導師に天台声明音律研究会の方々に御参加をいただいた。当日の馬場あき子氏講演は44～69頁に掲載。

寺報　ぐらびあ

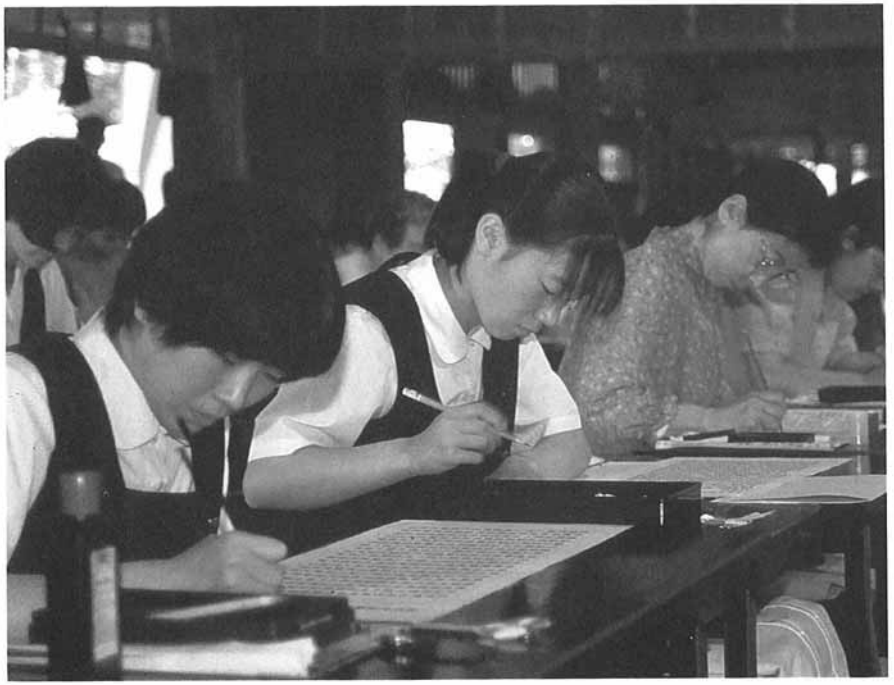
金色堂國寶指定100年記念祭
文化講演会
みちのく－文学とこころ
7月5日岩手県一関市／9月14日秋田市／10月16日東京都

左頁　7月5日岩手県一関文化センター
大岡信氏（上）は「いのちの言葉　ことばの命」上野洋三氏（中）は「『奥の細道』芭蕉直筆本を読む」千田孝信貫首（下）は「心が光る　光堂」の演題で講演。

法華経一日頓写経会

7月13日　中尊寺本堂

金色堂國寶指定100年記念祭の大きな行事として法華経八巻を一日で書き写す頓写経会が、15歳から80歳代の老若男女と一山僧侶合せて150名の参加で行われた。

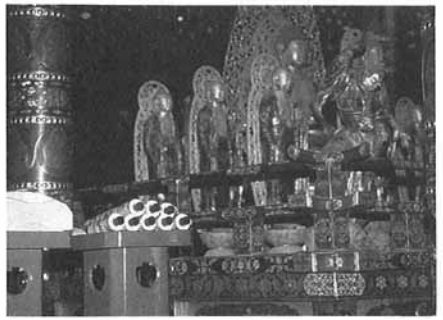


如法写経十種供養会　金色堂納経

（一日頓写法華経・般若心経）

7月17日　中尊寺本堂、金色堂

清衡公御命日のこの日、胎蔵界曼荼羅供とともに7月13日に写経された法華経と般若心経の十種供養会が行われ、金色堂に奉納された。



中尊寺薪能

8月14日　中尊寺白山社能楽堂

100年祭期間中に行なわれた第21回中尊寺薪能。
「吉野静」（上）「黒塚」（下）と狂言「咲嘩」を披演。

100年祭記念郷土芸能奉演会

10月26日　境内・中尊寺白山社能楽堂

9月7日より奉演されてきた郷土芸能。
最終日の10月26日は境内で川西大念佛剣舞（右下）能楽堂では中野神楽（左下）
鴨沢神楽（上）が奉納された。

藤原四代公追善 紺紙金字法華経奉納 十種供養会

11月10日

中尊寺本堂・金色堂

金色堂國寶指定100年記念祭の結願にあたり東京都植村和堂氏より紺紙金字法華経が奉納された。

金色堂國寶指定100年祭をご紹介いただいた新聞、雑誌

産経新聞「歴史ドラマランド」（上）雑誌「ウインズ」（中左）と「ミマン」（中右）この他、たくさんのマスコミでご紹介いただいた。

金色堂國寶指定100年記念祭を紹介した印刷物

ポスター（左頁、右上）、記念講演会東京会場ポスター（左上）
リーフレット（右下）シール（左下）等で紹介した。

金色堂
――昭和の大修理から三十年

小西暐也

はじめに

金色堂の漆芸修理をする。

今から四十年前、金色堂に昇堂して拝観、平安時代のひどく傷んだ御堂（みどう）を知っていた私は、そのようなことを考えもしなかった。

人生、予期せぬことが現実となるのも摩訶不思議なことである。昭和三十九年の夏の暑い日であった。突然、東京高輪の父の事務所へ来訪された三氏（佐々木實高中尊寺執事長、服部勝吉金色堂工事監督、五十嵐牧太同主任）から、いきなり「金色堂漆芸工事全部を向う四年間貴社に依頼したい」、「この仕事は中尊寺にとっても、また国宝保存事業としても大変重要なことで、ぜひ協力をお願いしたい……云々」と。生憎、不在だった父（小西重太郎）に代って応対した私は、事の重大さに息をのみ、言葉もなかった。

万事に慎重だった父も、中尊寺と金色堂委員会を代表して執事長と工事監督が直々に来訪されたこと。普通、国宝や重要文化財建造物の仕事は金額も一寸大きくなれば入札となるのが普通であったが、このような形の「特命」に深く感じ入った様子で、結局工事を引き受ける決意を固めたようだった。

あの時から早くも三十数年の歳月が過ぎたが、右の三氏はすでに鬼籍に入られ、父も同様である。が、晩年に近くこの最も記念すべき金色堂昭和大修理を請負の最高責任者として過ごせた父重太郎は正に職人冥利につきるといえよう。金色堂完成の後、翌年から四年の歳月をかけて伊勢神宮第六十回遷宮（昭和四十八年）に伴う神宝の主要な漆芸品五十五点を完成して、暫くして他界した。八十六年の人生を漆芸・極彩色の世界に生きてこれらの大きな仕事を二つ終えて往ったことは、やはり大

変幸運な生涯だったと思う。その幸運の一端をはからずも担うことになった私は、金色堂工事の実務全般を担当して四年間を過ごすことになった。

当然のことながら慣れない仕事の連続で、錚々（そうそう）たる顔ぶれの委員の方々とこれほど接触し、直結した工事も珍しく無我夢中で取り組み、いろいろと飜弄されながらも諸先学から実に多くのことを御教示いただいた。ところが、漆芸工事着工（昭和三十九年）の翌年には新たな難題、内陣後方二本の巻柱（乾（けん）と坤（こん））の復元模造製作が決まり、続いて1／5金色堂の製作も決定するという、多大な困難がつきまとう金色堂漆芸保存修理だけでも大仕事である上に、別の機会に別件でやるような製作が二つも重なる――とは全く驚いた話であった。その時、仕事は金色堂関連のものしか出来ない、と思ったがほゞ同時期にスタートした皇居新宮殿（当時）表御座所等の漆芸工事もからむため、やるべき仕事は宮殿と金色堂だけと決めることにした。

ひるがえって、金色堂工事が終わって三十年が過ぎたが、改めて当時の工事などについて考えてみることは大いに意義あることであろう。

戦後、まだ十七、八年しか経っていないあの時代にスタートして、平安時代漆芸の集大成ともいえる金色堂の、経年による全体の損傷、劣化が進んだ状態のものを、工期僅か三年七ヶ月の短期間で完成させた、ということは誇るべき偉業だったといえよう。夢、幻かと思うような漆芸工事に、参加した人工全員の多大な苦労なしにはなし得なかった大事業である。しかも中味の濃い確かな昭和の大修理で、蘇えった金色堂は、将来小修理はともかく、工芸品なみの保存と注意深い維持がなされているのを見れば、余程の天災地変でもない限り半永久的に手を入れる必要がないのではないか。それだけの保存、一部復元修理工事が完成して、新覆堂によって保護されている。建造物として、こうしたことは他に類例もなく、金色堂だけであろう。

成功裡に終わった昭和の大修理の基になったことはいくつもあろうが、ここに二つほどあげてみ

たいと思う。

その一つは、何といっても人、人材であった。漆芸工事に参加した多くの方々は、松田権六先生もご健在で、当時一流の名人数名を中心に、人間的にも素晴らしく腕の立ついい人材を得て、すべてを纏めあげられたのではないだろうか。それも、技術の大変厳しい時代（明治）に生まれ育った工人が三人も参加されて、同様大正生まれの漆芸家と協力しながらひとつひとつ苦労をいとわず完成させたこと。時代も高度成長前の比較的落ちついて割合ゆったりした頃でもあったのが幸いしたのかも知れない。

もう一つは、漆芸工事特に金色堂のような建造物内陣に沢山必要とした素材――夜光貝の問題である。金色堂工事では大きな夜光貝（詳しくは後述）でなくては使えなかったが、それを五〇〇個（沖縄産）ほど一度に揃えるのは現在では全く不可能になってしまった。近代の乱獲に近い採取が原因だが、もっと南方からという話があっても、それらの国々では所謂一次産品の輸出を禁止していると聞く。また、アフリカ産の夜光貝は白色ばかりが強く金色堂のあの微妙な色艶がない。素材だけに限ってみても夜光貝を考えると、あの時点での工事は全く正解だったのである。五百数十個の夜光貝を注文して直ぐ手に入れた時には、そのようなことは全く考えもしなかったことであるが――。

また、今後金色堂で唯一気になるのは、昭和四十三年工事竣工後空調による予想外の木部、漆芸部分への影響で、木割れ、金箔そして漆塗など傷んだところがひろがって、それをどのように手を入れるか、大きな課題として残る。割れが出た部材のはぎ目、合わせ目など三十年経過して落ちついてきている金箔と、修復に使う新しい金箔の色、艶などの調和を図ることは大変難しいが、これを上手に解決してゆかなければならない。

1　金色堂工事

金色堂の工事計画は意外に早くから始って戦後わずか十四、五年後、つまり昭和三十四、五年ごろには調査工事を始めている。

それから一年おいて文部省[注1]で国宝金色堂保存修理委員会を組織し中尊寺に工事事務所を開設（昭和三十七年）。調査、計画から二年後に着手したということは、木工、漆芸等覆堂も含めて金色堂建築部材の破損・腐朽・漆の劣化など中尊寺当局の大きな危機感と深い憂慮あってのことであったろう。

金色堂工事着手が、思わぬところへ波及して我々を驚かせたことがあった。その頃父がやっていた漆塗、極彩色（ごくさいしき）の重要文化財浅草神社[注2]（三社）の工事監督と同主任が、まだ始って間もない三社さまの現場をおいて、突然中尊寺へ赴任してゆかれた。前記の服部、五十嵐両氏である。大変急なことだったので後任の工事主任が決まらず困ったことを憶えている。

金色堂は付帯工事も含めて大きく分類すると、前半は解体を含めた木工事、後半は前半の中頃から始った漆芸工事一色という感じであった。全体の概要は

①覆堂の解体移築、新覆堂の建設と金色堂の全解体、内陣漆芸修理完成後の組立。

②金色堂内外陣の漆芸保存、及び一部復元修理工事。後方二本の巻柱復元模造。原文化財二本の別途保存。中央壇、西南・西北壇の高欄復元模造。それに1／5金色堂の製作。

ということで、書くのは実に簡単だが、この極めて困難な平安時代の工芸的建造物の漆芸、金工修理、新規柱二本と三基の高欄の復元模造、加えて1／5金色堂の製作を三年半の工期でまとめ完成させなければならない、実に大変な日々であった（着工昭和三十九年八月竣工同四十三年三月）。

内陣の漆芸修理を東京上野でやることが決って、鳴りもの入りの輸送の話を――。

金色堂漆芸修理の中心であった蒔絵、螺鈿等の内陣部材（内法長押など）全部を一度に東京へ運ぶことになった。その時、「当日はパトカー先導で汐留から上野へ行くので、トラック隊の列の後ろを見張ってついて来て欲しい」――と五十嵐主任。一ノ関駅から貨車で到着した金色堂の内陣を日通

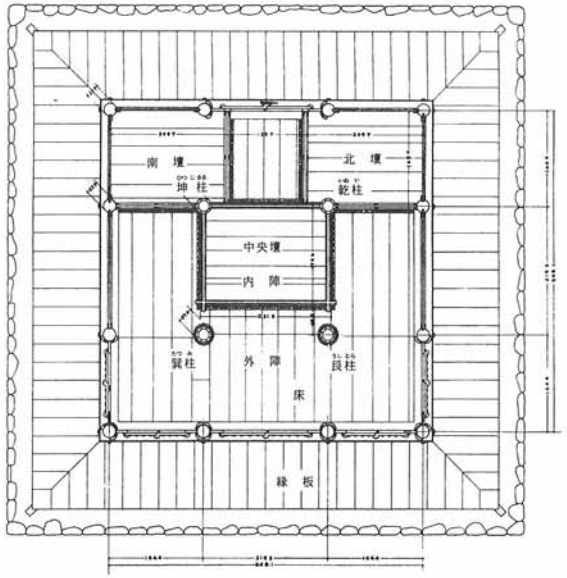
美術運搬車数台にのせて、一般道路から首都高速道路へ。あの頃パトカーのサイレンはけたたましい音をたてて走っていたから、大きな鳴りものでの輸送だったがこの計画は関野克委員が、少し前にやった正倉院展の時に宝物類をやはり汐留から東博[注3]へ事故もなく無事運んだ――というのが、金色堂でもやられた理由だったらしい。私はパトカー先導で車を走らせたのはあとにも先にもこれだけで、古い昔のことだが、今懐しく思い出す。

三十年も経って古いノートなどを見ながら当時を思いだすと、修理、ひとそして苦労した素材調達などなど、諸事錯綜してまとまらないが、金色堂工事で最も重要だった前記②の内陣・外陣の漆芸保存、一部復元修理工事を中心に書いてみたいと思う。

2　漆芸工事

◎内陣螺鈿、蒔絵修理

ひと口に、漆芸工事といっても金色堂の場合は他の文化財建造物のようにただ漆を塗って金箔、そして極彩色を描く[注4]――というのではない。中心となる内陣は蒔絵、螺鈿そして沃懸地など建造物としては他に類のない平安時代漆芸技法の修理工事という大変困難な仕事であった。八百数十年の

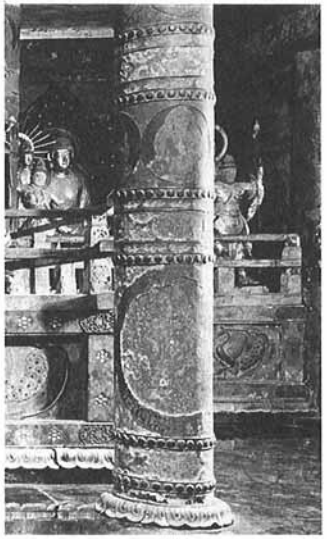


経年による傷みや、後述する近世までの恐らく人為的な破損もあったと推察され、総体に著しく進

1 金色堂内陣修理前

同修理後

んだ劣化や損傷は極限を越えていて、建立以来初の全解体、本格的大修復の漆芸工事は歴史的な大



3 螺鈿大円文（艮柱、修理前）

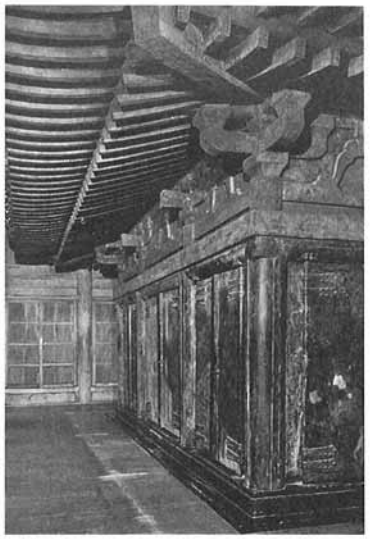
2 巽柱下部（巽柱、修理前）

事業だったといえよう。

金色堂内陣修理前の状態は、特に手前二本の巻柱（艮と巽）下方の螺鈿大円文、沃懸地とその外側円窓の宝相華唐草蒔絵の欠失は想像をこえるほどの傷みがあった。昭和三十二年頃、芸大在学中に私が拝観、見学したとき内陣を間近に見て、ひどく驚くと同時に八百数十年の間、傷んではいるがよくこの状態で保持されてきたものと、深く感銘を受けたのを憶えている。その頃は石積みの基壇の上に覆堂が建っていてその階を二段ほど上ると、覆堂の床になり、靴をぬいでその床板に立つ。そこが金色堂の縁の上にあたる部分で、あと二～三歩あるけばそこは金色堂の縁長押と敷居。ひとまたぎで光堂の床に立っている、そして手をのば

4 大円文外側円窓の宝相華唐草蒔絵（修理前）

5 旧覆堂外観



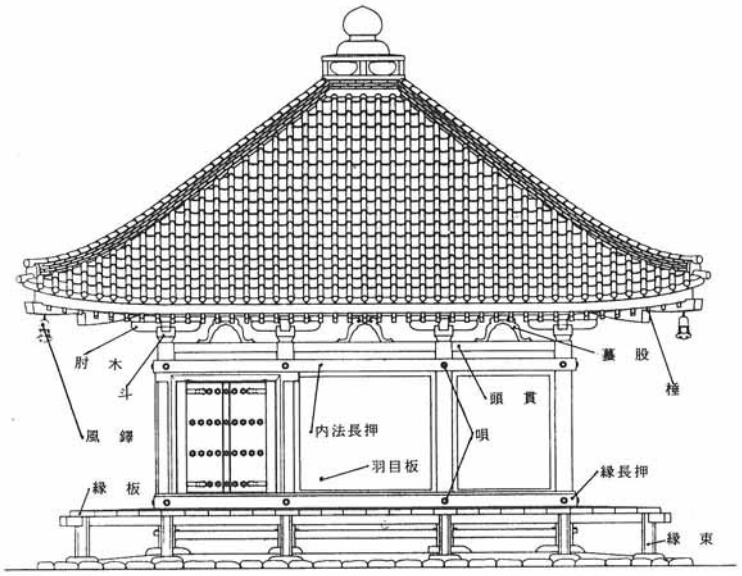
同内部

せば巻柱や内法長押の蒔絵や螺鈿にいくらでも触れられる状態であった。今では無論考えられないことだが、座してお参りした後、終日茫然とこの平安の御堂を拝観しながら、これは中尊寺当局の広大無辺な信者に対する慈悲、或は拝観者、見学者衆生へ御仏の大きな恵み、文化の授与、伝承などなどかって多くの人々に与えたものは計り知れないものがあったろう、と思った。ある意味ではこの平安文化の美事な大傑作をじかに観ることができる良き時代でもあったのだろう。見方をかえれば、心ないいたずら者が宝相華唐草の螺鈿を持ち去ったこともあろうし、或は信仰の厚い人々が仏さまのご利益を、といって螺鈿をひとつ頂いて帰ったということがあったかも知れない。それらは巻柱の上方内法長押や蟇股など高い箇処ほど螺鈿が良く残っているのを見ると、やはり人為的なものを感じるのである。これら巻柱の螺鈿沃懸地の欠失は昨今或は近代のことではなく、近世以前のことゝ思われる。

◎後世修理と赤錆

明治三十年修理の際には、すでに今回の修理前の状態に近い劣化、損傷が進んで、内法の長押や無目鴨居などに使われている赤錆が、巻柱の大円文や螺鈿帯（特に巽柱）には僅かに見られるだけで、当時赤錆を使って剥落止めを施すだけの螺鈿、沃懸地がすでに少ししか残っていなかったことが推察される。既知のように明治修理は、それまで何度か修理された中で元禄の修理でも慎重を期して内陣に手を付けることを避けたのに対して、かなり思い切った荒っぽいともいえる修理を行っていた。そのひとつが前記の赤錆修理であるが、参考までに述べると金色堂、経蔵の堂内具類（経案、灯台など）と八角須弥壇は昭和五十二年から七年の歳月をかけて保存修理（文化庁監修）を行ったが、これら全部の国宝堂内具・須弥壇に赤錆修理がみられたのである。赤錆は、前記のように金色堂修理の際、使用された時代は判明していたが、金色堂修理を含めてこの後世修理の赤錆を除去するのに大変な苦労をする。しかし、八角須弥壇や金色堂で

も明治の赤錆修理によって失わずに済んだものは決して少くなかったと思われる。



漆芸工事は、燻蒸(くんじょう)[注7]と赤錆落しから始った。漆芸修理全体の概要を述べると

①燻蒸、赤錆落し、養生、移動螺鈿[注8]の確認、螺鈿・沃懸地・蒔絵の剥落止め、欠失箇処の漆下地復元。

②文様(もんよう)写し、現状模写記録（螺鈿文様、蒔絵地文様、円光仏等）。

③文様の復元図作成、螺鈿文様切り抜き、蒔絵粉の試作と同手板作成。

④螺鈿文様貼り付け、漆下地、沃懸地、塵地、蒔絵地文様の蒔絵復元、円光仏欠失箇処繕い地蒔き、螺鈿毛彫、玉装、伏彩色(ふせさしき)[注9]緑青塗り。

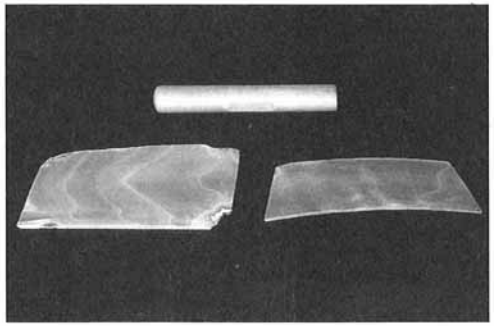
などなどの工程で、燻蒸は文化財修理では当然の処置であるが、明治修理の赤錆は、当時から凡そ七十年経過しているにも拘らず実に堅牢に残っていたので掻落しに多くの時間を要した。無理に力を入れ過ぎると下の螺鈿や蒔絵などを傷めてしまうため、大変な神経と力を必要とする作業だった。これと並行して螺鈿、沃懸地の養生、仮止めそして一部剥落止めを行った。螺鈿養生には当時珍ら

しかったストリップ[注10]塗料を用いて表面の劣化が進んでいた螺鈿文様の漆液による汚れの防止に使用。前記赤錆は掻落しに手間取ったため皆の嫌われものになっていたが、これは「紅殻錆漆」で、砥の粉、紅殻それに生漆の混合によって作られたもので非常に強力な、薄赤色の錆漆だった。強い錆漆になった理由は、紅殻は酸化鉄であり、漆は鉄と強く結び付く性質があるためあれ程の力が出たので、これは金色堂漆芸工事の大きな発見のひとつだったという（田口氏）。

◎漆下地と塗り、螺鈿復元図製作

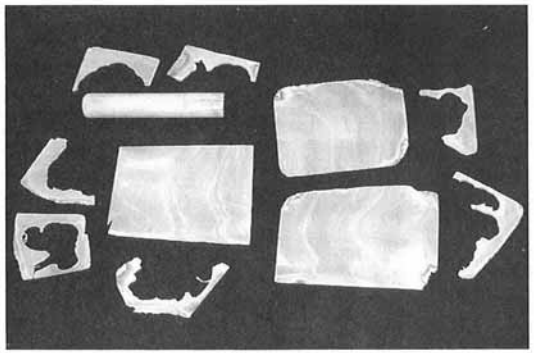
長押や頭貫(かしらぬき)などの赤錆除去、養生、仮止めそして移動螺鈿の確認などをした後、漆による剥落止めや欠失した漆膜、つまり漆下地による復元を行う。これは螺鈿沃懸地そして巻柱の蒔絵地文様の箇所も同様で、あわせて剥落した螺鈿文様の写し、残存する螺鈿、沃懸地等の現状模写、蒔絵の一部模写図を作った。

模写図などと並行して螺鈿、蒔絵地文様の復元図をおこす。この復元図をもとに螺鈿文様の切り抜きを始めた。金色堂で使用した夜光貝は沖縄石垣島と屋久島の原貝五百個ほどをかますに入れて東京へ輸送。金色堂に使用する摺貝(すり)[注11]は宝相華文様を切るために大きなものが必要なため当然原貝も大きくなくてはならなかった。年数は五十五年～六十年ものので、重量は一・五kg前後、巻貝であるので寸法は測りにくいが長いところで二十cmもあ



6 摺貝　表面が平坦なものと曲面（巻柱用）のもの。棒状のものは認印

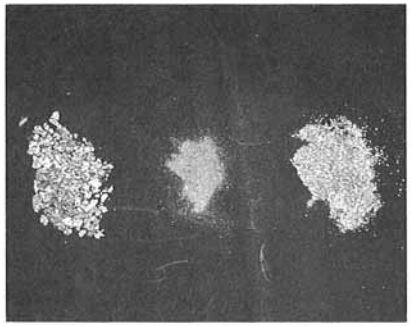
8 片岡華江氏



7 夜光貝の大。文様を切り抜いた残り

る大きさだった。これを何度かに分けて大阪の泉南にある摺貝の加工所[注12]に送付。出来上った摺貝の厚さをほゞ同じ三寸六分（摺貝は百枚単位で扱う、この場合一枚の厚みが約一・一㎜）に選定して、螺鈿文様復元図とこれら摺貝を螺鈿師[注13]（写真8）片岡華江氏に渡す。片岡氏は螺鈿文様の切り抜きと毛彫りを担当された。言うまでもなく、螺鈿の第一人者だった方である。

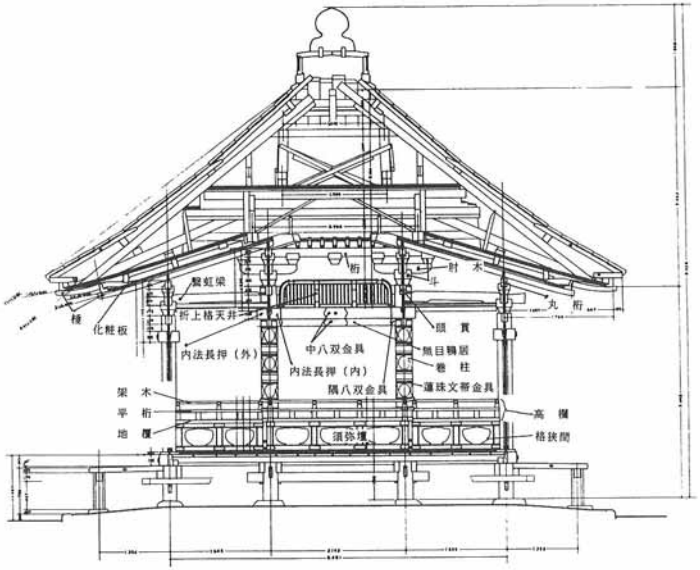
これらの仕事と並行して進めていたのが蒔絵・沃懸地用の金粉造りであった。金粉製造は殆ど全部東京両国の清水佐太郎[注14]（写真9）（蒔辰）氏に特注依頼し



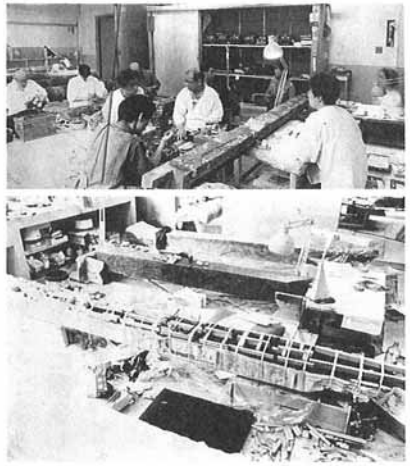
9 砂金二種と鑪粉（中央）　右が岩手産
左が山形庄内産

て、試作の段階から大変めんどうな粉造りをお願いした。一番問題になったのは金沃懸地に使う鑪粉[注15]で色、粉の形などが重要視され特に金色堂に使われている鑪粉は青味があってヤキ[注16]単色の色ではなく銀を含んだ、つまり金に銀を割金[注17]した暖か味のある独特の色をしていたのである。造幣局に依頼して出た分析結果をもとに割金して、清水氏が金粉を作り手板に沃懸地を作っても色が出ない。数回繰り返して種類を増やしたが結局望む色ができず、小委員会ではヤキだけで鑪粉その他の蒔絵用金粉を作ることに決った。銀粉、青金粉も同様の解釈で現代の純度、配合のものでやることになる。ひるがえって当時の分析結果と試作沃懸地金粉との違いを見ると、造幣局の分析値は信憑性が薄く、あれはインチキだったのではないかと思っている。もし、近い将来そういう機会があれば、より正確な数値を出す処に依頼して、改めて作り直してみたいと考えている。

さて、内陣の部材は大物が巻柱、内法長押、無目鴨居そして頭貫、中でも長押は内長押・外長押、無目も内外下端にも螺鈿沃懸地の加飾があるためこれら十五本の横材修理の作業量が多く修理が軌



道に乗りだしたら、当然手が足りないことが分ってきた。蟇股は三個だけだが、数も多い斗栱などは桁を受けて、高い位置だが皆工芸的手法を駆使したものであったから全体の修理面積も多く自然と多勢の手が必要になった。(写真10)



10修理作業場（東京、上野）

◎内陣漆芸に携わった人々

途中ではあるが、金色堂漆芸工事で中心になってまとめた方々について、こゝで改めてふれなければならないと思う。

修理委員会において、漆芸修理に関しては殆ど全部を決めておられた松田権六先生が中心となって、高弟の漆芸家大場松魚氏、(注18)同田口善国氏、(注19)そして弟子ではなかったが同じく漆芸家三浦明峯氏(注20)の三氏が主要な仕事を全部てがけて、漆芸の修理を全うされた。

分担は大場氏が漆芸修理全体の責任者、田口氏は螺鈿、蒔絵と円光仏（復元模造も含めて）の現状模写、文様の復元図製作、そして実際の蒔絵、沃懸地と多岐に亘った。三浦氏は蒔絵に専念、責任者の大場氏と共に蒔絵修復に終始つくされ、特に復元模造した巻柱では重要な役割を担っていた。

漆芸修理は初期の段階では右の三氏を軸にして東京在住者中心にスタッフが編成されていたが、作業量が増えるにつれて金沢や輪島から日本工芸会関係の漆芸家が参加するようになり、一時はかなりの人数が修理室で作業をするようになった。それぞれ個々に仕事を持っている人がいたので多少出入りはあったが工事に携わった方々は皆確かな漆芸家ばかりで、作家をめざす若い人達も何人か助手として参加していた。云うまでもないことであるが、この大変難しい金色堂漆芸工事をするには非常に微細な蒔絵技法が要求される上に、巧みな髹漆技法(注21)をもあわせ持った工人でなければならなかった。が、幸いにして、当時これ以上の人材はなし、といわれた名人達で、彼等を中心にやる気満満の心意気が完成へと導いたのであろう。

また、復元図製作は田口氏の他に文様画師山崎(注22)昭二郎氏が加わって、難しい欠失螺鈿の復元など二人で全部をまとめたものである。

前記、漆下地によって欠失箇処の復元等を行ったが、漆芸工事に使われた素材のうち、特筆に値するものに漆がある。金色堂創建当初も当然平泉この地方の漆が使われたと考えて、岩手県北の浄法寺の漆を全工事に使うことを決め、取りよせた。それもこの年に漆山で採取したままの生上味漆、荒味（漆樹の皮なども入ってた）と稱する最も強い（においも強く、力もありかぶれ易い）漆を三十貫（約一一五kg弱）ほど購入した。改めて云うまでもなく、これは文字通りの純日本産漆であって町の漆屋さんでは勿論、少し大きな漆商からも一度にこれだけは簡単に手に入らない、質のいい漆と量の多さだった。この頃、日本産漆といっても一般の漆屋さんで需めるとチャイナの漆が半分、或はせいぜい日本産が三割程度で、上塗に使う黒漆や透漆も同様、漆芸をやっている人達も高価な日本産漆だけは使えない、というのが一般的で現在でもそれは云えることである。浄法寺から買った漆はこれ以上のものは他にない、という程いい漆であったが、何と金色堂漆芸工事に参加していたプロの漆芸家の何人かがこの漆にカブレてしまったのである。普段使いの漆の積りで油断していたのだろうが、金色堂で使ったこのような漆は、他の国宝建造物修理工事では日光以外では使ったことがない（平成九年現在）特別なものであることを付記しておく。また、金色堂工事に参加した漆芸家諸氏にとっても誠に貴重な体験だったのではないだろうか。

◎夜光貝と中尊寺地の粉

前述した螺鈿文様切抜きの中で最も困難だった

のは巻柱に使う夜光貝（写真11）だった。巻柱下方の大円文の宝相華唐草（写真12）は二本（艮柱と巽柱）とも殆ど欠失（写真13）していたゝめ正背面とも全面に近い復元修理を行わなければならない。円柱（直径八寸七分、約二六・四㎝）であるため平らな摺貝では使えず、円周の曲線にあわせて曲面の摺貝を作った。切り抜きは文様の線木口の角度が柱の芯を向いていなければならず、これは難しい作業であるばかりか宝相華唐草の花と葉と蔓の数が多いので、片岡氏の仕事は大変な作業だったと思う。

内法長押など横材の螺鈿が切り上った段階で文

11夜光貝の原貝と切ったもの

12巻柱宝相華唐草（大円文）完成

13巻柱宝相華唐草（大円文）修理前

様の位置の確認そして文様全体のバランスを見て麦漆で貼り、漆が乾燥した後で下地を付ける。螺鈿の厚みが約一・一㎜のものに漆下地をつけて平滑にすることを考えると、一般には相当回数下地を付けなければできないが、手板造りの段階で五十嵐主任が中尊寺地の粉を発見された。これを使うと一・一㎜厚の螺鈿が数回の漆地付けでほゞ平滑になることがわかったのである。中尊寺地の粉とは、漆と混合して使う土の粉（瓦の粉の場合もある）を平安時代にわざわざ京の都から運んではいなかろう、と中尊寺山内の裏山で採取した土を使ったら漆が良く乾いた。その上、ある程度下地を厚付けしてもウマずに（注23）乾くということで金色堂漆芸工事では全部この地の粉を使用した。名付けて「中尊寺地の粉」といい、金色堂工事に伴う発見のひとつであった。

全体に漆下地が終って漆塗りに入る。この作業は特に一般の仕事と変りないが、下地の仕上げ同様に残存している沃懸地や螺鈿をよけて塗る。場所によって異るので数回塗りを入れて研ぎ、蒔絵の研ぎ立ての状態で下付漆を塗り金鑪粉を蒔く。それを粉固めして調子をみながら炭研ぎして、場合によっては繰り返す。沃懸地の艶は修理している当初のものと違和感のない感じに仕上げることにした。

一方、巻柱の方の螺鈿と沃懸地はほゞ同様に仕上げたが、巻柱の最重要部分である円光仏（尊像）の研出し蒔絵は、欠失して不明な部分は持物でも裳、手印なども仏画としては復元せずに、金粉の地蒔きをしてポッカリ黒く穴があいたように見えるのを避けた。しかし正背面と左右尊像の間にある地文様の蒔絵、上から七宝繋文、宝相華唐草文と石畳文などの欠失箇所は、文様の形や流れを慎重に復元して調和をはかることとした。（写真14）

仕上った復元螺鈿の毛彫りは全部行わず、一部にとどめた。また、玉装（注24）は螺鈿の宝相華唐草文の花文にある透しの部分に象嵌したが、巻柱が主体であって一部朱を透しの部分に塗りその上に透明な瑠璃を埋めるという、一種の伏彩色の方法で行

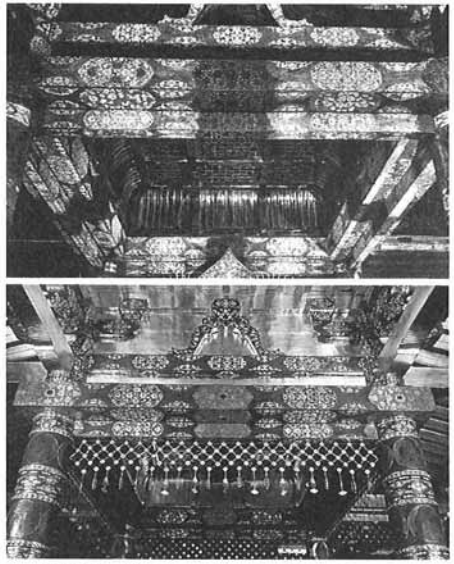
った。後に復元模造した後方の柱二本、南北須弥壇、そして同様に復元模造した三壇の高欄にもそれぞれ色は朱と群青の玉装を施した。

伏彩色は、他に内法長押と無目鴨居の透八双金具（中と隅）下に、天然の緑青（注25）岩絵具を膠彩色した。中央壇の上下框、束の透宝相華の花文に朱色の伏彩色があったとされたが、委員会で今回は見送ることに決まり、朱色の彩色はしなかった。しかし試作した手板に彩色した朱色は金銅金具の金、銀そして焼付して研いだ半艶消の黒漆と見事に調和していた。（写真15）

14巻柱尊像　連珠文帯金具（左修理前）（右修理後）

◎金色堂金箔と漆塗り工事

上野の東京国立文化財研究所脇の作業所で進めていた螺鈿や蒔絵など内陣主要部分の漆芸工事と並行して、金色堂の金色たる金箔漆塗り工事を現



15内陣見上げ（上修理前）（下修理後）

地中尊寺山内の金色堂から近い二ヶ所の作業場で行っていた。金箔漆塗りの坪数は金色堂で最大の加飾面積をしめる部分であるが、この様な建造物の漆工や漆箔の仕事は工芸品など小物の漆芸とはまた違った難しさがあるものである。幸いにして、金色堂では塗飾杉山戈一（注26）、新井清両名人が、最初から多々困難が伴うこの工事を見事にまとめて、美しい光堂に生まれ変った。ご両人はともに日光東照宮本殿や輪王寺大猷院廟（共に国宝）など難しい建造物の漆工、金箔に永年に亘ってまとめてきたこの道の第一人者で、打ってつけの人材であった。

作業場のひとつは讃衡蔵の地下に南側から直接出入りのできる部屋を、大羽目板等の漆工修理に使用した。大羽目の内外漆膜をそのまゝ残すべく、剥落止め、下地繕い、何回かの生上味漆の含浸等によって活性化させる。旧漆塗りの塗膜の上に漆を塗ることは一切せず、全く美術工芸品同様の修理手法で時間をかけて行った。大羽目の厚い漆膜の剥落止めは強い力がいるため剥離した漆膜に麦漆を入れて、上から棰材のような太目の押え棒数本で圧着した。厚味のある漆膜のため乾燥に九～十日以上を要したが、外陣廻り全部を同様の保存修理で行った。これらは小さな工芸品の修理と同様の工程で行ったので広い坪数の建築部材剥落止めは実に気の遠くなるような作業の連続であった。螺鈿、蒔絵の内陣のみならずこれら外陣まわりの工芸品同様の漆工剥落止めの仕様は、数ある国宝重要文化財の中で恐らくこれが最初で最後の仕事であろう。それらは、最終の仕上げが漆箔のところも、またところどころ僅か金箔が残存している箇処も同様の保存修理を行った。剥落止めが終った後は欠失した漆膜、漆下地の部分復元を行って、生上味漆の含浸。外陣廻りは組立後、再度漆工の手を入れることも考えられたがひと区切りを付ける。

金箔は大半が金色堂組立てが完了してから行ったが、組立て前に施工したのが内陣天井鏡板、小組そして板戸正面六枚、両側面四枚の計十枚である。当初決定していなかった金箔復元の区分が決

まり、外部は西側（背面）を残して軒から縁下まで、内部は西側大羽目板、天井南北両側も羽目、左右出入口そして幣軸などを除いて金箔の仕上げとなった。

◎金色堂の金箔、名付けて古代箔

金色堂に使われていた金箔は、屋根裏の化粧板などに僅か残っていたが、それらを精査した結果、耳を落していない打ったまゝの金箔を使っていることが判った。[注28]大きさは現在市販の大きい方、四寸二分（一二・七㎝角）の箔と大差はなかったが、厚みは三～四割厚目の感じで中央部分より廻りがやゝ薄目に打った金箔、という印象を受けた。この金箔を私は古代箔と呼んだが、欲した金箔が完成するまで前後七～八回繰り返し製箔して、やっと望み通りのものになる。やゝ厚目の金箔であったので金色堂では摺漆を重く摺ってしっかり箔押しを行った。内部床、縁板（槍鉋仕上げ）と縁束など新材又はそれに近い復元材の部分は別として、前記剥落止めなどを行った旧漆塗膜の表面は当然平滑ではなく微妙な凹凸や斑もあって厚目の古代箔を押すと、古い漆膜がそのまゝ金箔の表情になって、おおらかでポッテリしたいい感じに仕上がった。

◎金色堂の漆塗り

金色堂を解体した時点で、それらの部材の塗りを見て私は、この御堂の漆塗は工芸品の漆を専門にしていた工人が作ったものだと思った。勿論、九体阿弥陀堂の造立などである程度大きい須弥壇などの漆塗りはやっていたと推測できるが、建築漆工は恐らく初めてか或はせいぜい二つ目ぐらいの仕事としてやっていたのではないか。つまり、羽目板、柱や斗栱でも漆塗りの各部分は丈夫に作ってはいるが漆下地や塗りなど、総体的におおらかなまとめをしているのである。前記保存修理をした旧漆塗膜も八百数十年の経年による劣化や痩せなどもあろうが、創建当初から神経質に全面をピタッと研いだり、ピカッとは塗っていなかったのではないか。それが全体的に極く自然なやわらかい感じにつながっているのだろう。桃山、江戸建築、特に数ある江戸時代の漆塗建造物と金色堂を比較すると、勿論時代は違うが、漆の仕事自体が全然違うことに気付くのである。

さて、金色堂の漆塗りと金箔仕様の中で最も仕様の重かったのが内・外陣の床板であって、床は当然のことながら最も傷む場所であり、刻苧、麻布着せなど、いわゆる総布着せで施工した。特に五十嵐主任は、我々が一番丈夫でいい麻布としてき平の麻布（帯芯などに使う）を使おうとすると納得せず、漆の布着せでは考えられないような太い麻糸で編んだ（といった方が正しい）筵状のものを着せろ、という。止むを得ずそんなものを麦漆で着せようとしたが、なかなか床板に馴染まない。また一旦貼っても今度は漆の乾燥に手間どって大変な時間を要してしまった。中尊寺地の粉の「大発見」で漆に自信を得た老主任さんはこのような難題を持ちこんでは我々を困らせた。粗い筵状の麻布着せは充分過ぎるほど涸して、漆下地を付けるがこれも何回かにわけてゆっくり進めた。塗りは箔下漆を全面に塗って古代箔をしっかりと押す。これも充分漆が乾いてからその上に朱合漆[注30]を塗って仕上げた。金箔の上に透漆を塗るということは一種の伏彩色、伏箔ともいえようが普通これを白壇塗といっている。塗った当時は南部漆特有の、透漆でも茶褐色が強くて下の箔がかすかに見える程度だったが、三十年経った現在は、あたかも薄茶の玳瑁[注31]を貼ったような美しい色と光沢をみせている。そして疵も余りついていない。

金箔押と旧漆塗膜（保存修理完成）のまゝ残すところを別けた。保存と復元修理が完了して、東京上野から搬入した内陣部材と現地で保存修理を行った部材が揃った段階で、組立てを開始した。組立てが終っても部材に隙間があれば埋木そして漆下地等の繕いを行った。それらが全部終った段階で内外部全体の漆箔を少しずつ施工して、古代箔のもつ箔の良さを生かしつつ仕上げた。

外陣内外部の漆塗りや金箔工事では、工事事務所の五十嵐主任と清水政春主任補佐の考え方が随分と違っていて、現場で仕事をしている杉山・新

井両氏や金銅金具飾(かざりし)の柿平(かきだいら)氏達を悩ませた。主任と補佐の漆や文化財に対する見方、考え方が大きく違っていたのが原因だが、五十嵐氏は文化財ではあるが金色堂の修復は最低限創建当初に近ずけるべくある程度はキレイに保存復元修復する、ということであったと思う。逆に清水氏は、あるがまゝ、きたないまゝ金具は曲っていればあまり手を入れずに、またそれを打った鋲(びょう)は真直ぐに打ち直さず曲ったまま打ち込め、という方だった。漆芸修理でも同様で、傷んだ小さな場所に一寸漆をかけようとして不自然さをなくそうとしても、それほど新しい漆を使いたければ金色堂を新しく作ってそれに塗れば良い、と大変強硬に反対されて塗師達が何度も困惑したことがあった。前者は少々無理があっても金色堂を良い形で昭和の大修理として後世の人々に見て欲しい、後者は金色堂は滅びゆく文化財なのだから少々汚れて曲っていたり、やゝみすぼらしい感じがしても古い建造物だから仕方がない。曲った鋲を打ってまたそれが落ちて欠失してもそれは仕方のないことなのだと、それぞれの方の文化財に対する美学が読みとれて、今思えば面白い。しかし、実際に工事作業をする工人の立場では困惑するのは当然で、同様のことが内陣部材の漆芸修理や巻柱の復元模造製作で、責任者の大場氏に数人の委員から委員会決定と違う指示を受けてやはり大いに困った、との報告を受けたことがある。何事にも云えることだろうが、十人十色、百人百色の美意識があって当然なことだが、金色堂のような他に類例のない国宝の仕事となればその思い入れも並のものではなくなるのであろう。しかし現場監理者の意志不統一は大いに困惑したが、そんなことから当時やりたらなかったこと、やり過ぎたことなど昨今気になることがある。

こゝで金色堂漆芸工事全般に使った中尊寺地の粉について付言しておこうと思う。前述したように漆と混合して厚付(あつづ)けしてもウマずに比較的良く乾く良好な下地材であったが、使い方を少々誤ると本来丈夫なはずの漆下地が傷み易いことがあ

る。下地材の漆との相性がよく漆との調合比が少くても、一旦はカリッと堅目に乾くので、漆の量を減らして使ったことがあったようで、その結果力が早く失われて剥離剥落の原因となるのである。後に（昭和五十一～五十四年）、紺紙金字一切経（大長寿院）の黒漆経箱（二七五合）を文化庁監修のもとで修理する機会を得たが、黒漆の傷んだ箇処を良く調べると、殆ど漆の力が失われて地の粉の層が付着しているだけという印象を受けた。勿論それ以前に数回、後世修理がされている痕跡はあったが、それらの修理は傷んだ黒漆は下地とも全部掻き落して新たに漆下地を付け新しく黒漆が塗られていた。その部分だけ全然違った艶と黒漆がみられたが、これら黒漆経箱は当時数も多く所謂量産したものであったろうから或る意味ではやむを得ない仕事だったかも知れない。

3　金工工事

金色堂の金工は漆芸と二分する重要な部分を形成しているが、特に中央壇の装飾は高欄を除いて須弥壇全部が金銅金具による装飾でできている。これらは漆芸とともに平安時代工芸の最高の技術がみられるものだが、先学の論考も多く、既に漆芸関連で多くの紙数を費してしまったので、ここには金工工事の最も重要な点について、簡略にふれてみたい。

修理前の金工、金銅金具は全部ことごとく緑青が出て錆化し格狭間の孔雀、框などの彫、鍛(たん)金のもの、蓮華座の鋳金もみな、創建当初の色が全くわからなかった。漆芸工事が進むにつれて巻柱の螺鈿、蒔絵など七宝荘厳が少しずつ平安時代の美をとり戻してくると、錆化した金工が逆に目立つようになった。そこで、金具のある部分を弱い蓚酸液で徐々に洗ったところ、かすかに金鍍金の金色がでてきたのである。委員会や監理者の方々が色めき立って、これはいけるということになり全部の錆を時間をかけて落すことに成功し、現在の美事な贅(ぜい)をつくした金銅金具に甦(よみがえ)った訳である。

なお、欠失した金具は全部新補して、須弥壇では孔雀二羽、外部では風鐸(ふうたく)、扉金具そして唄など、

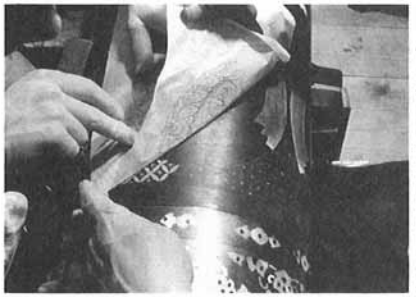
内部では巻柱根巻と須弥壇下框の蓮華座金具の一部などを復元して打った。

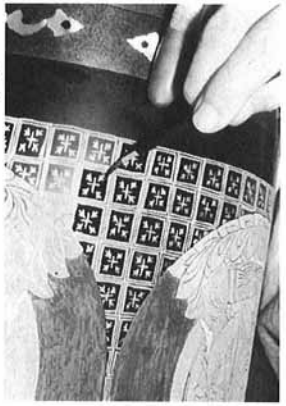
●巻柱、高欄の復元

金色堂漆芸工事着工後に決定した復元部分は、後方二本の巻柱（乾、坤）、中央、南北両壇の高欄三基であった。すべて新しく作る、という意味ではかなり未知な部分が多く、これらの復元製作にも難問が沢山あったが、内陣の漆芸保存修理にはなかった点を、いくつか取りあげてみたい。

巻柱の復元模造で、他には見られず、最も大きな特色のひとつは素地造りがあげられる。解体した外陣の丸柱径が約一寸（三・〇三㎝）太く、内陣巻

16巻柱復元（乾・坤柱）作業





柱はヒバ材を八角に削った芯材にやはり木目の良い柾（まさ）の杉材を八方から八枚打ち回し鉄鋲で止める、という独特の造りであった。それを丸く削り出す訳だが、このような工法だと一本で造成した柱と比較しても縦割れや全体の狂いが少く、螺鈿、沃懸地そして円光仏蒔絵などの荘厳装飾をしてもしっかりした耐久力をもつという、上代のすごい智恵の働いた驚異的工法をとっていたのである。巻柱の素地は全く同様の技法と材料を使って復元、漆芸の作業も漆の最も重い仕様で刻苧、布着から全部の工程を行う。当然、途中宝相華唐草文の螺鈿を貼り、漆下地そして漆塗り沃懸地を蒔く。地文の石畳文など、尊像（円光仏）そして巻柱下部大円文外側の宝相華文様の蒔絵など全部を描く。復元する新規柱の仕事によって保存修理の際に多々生じた疑問点や研究課題だと思われていたものが、実際に新しく製作することによってそれらの課題を試行錯誤しながら解決し発見した、復合効果は非常に大きなものとなった。

新規柱でもうひとつ問題となったのが尊像の復元図製作である。損傷が著しく取替えることになった柱だけに坤柱（南西）が最も傷んでいて、復元する柱は創建当初に限りなく近づけるべく可能な限り蒔絵の痕跡、他の菩薩像との比較そして資料調査等々時間を費やした。

描き割り円光仏画は、一本で十二体、二本の巻柱で二十四の尊像図を復元して蒔絵を行う。この復元図は田口氏が担当した。委員会では田口氏がこれらの図を前にして仏像の専門家との質疑応答を繰り返し、時には納得のいかない委員と作業場に横たえてある柱の前で議論をかわすこともあった。この絵様復元は誠に貴重な仕事となったが、同様に文様関連の復元で螺鈿の方は前方二本の柱

で復元文様はほゞ完成していたので、後方の柱で欠失した螺鈿文にそれぞれ合わせて製作、貼り付ければ良かった。

円光仏の復元蒔絵では、全面新規に尊像を描く作業に入ったが、一般に使う金粉と比較してもかなり粗い大粒の粉であったため、この蒔絵に挑んだ三浦、田口の両氏も悲鳴をあげ、最初は苦闘をしいられることになる。つまり、白描の復元図から蒔絵のための置目をとり尊像を描いて金粉を蒔いたが、金粉の粒が大きくやゝ粉が不揃いの、特別なものだったため描き割った線が細くなり、所によっては狭すぎて線が見えない場所も出来てしまったこと。しかし、驚いたものの三浦氏は冷静に、漆がしまり乾き加減をみて、針の引っ掻き技法よろしく、原文化財と変らぬような線に最後は仕上げたという。この名人の仕事振りに驚嘆したのが田口氏だが、次からは両人とも描き割りの幅を広くとって下付け漆を描き、丁度いい感じに仕上ったという。余談だが、酒好きの三浦氏は酔うとよく「俺は松田（権六）より蒔絵は上手いンだ」といっていたが、人間国宝になる前に亡くなってしまった。

この巻柱は、金色堂竣工後約三十年たって改めて精査すると、前方二本の尊像の描割りは一般のそれとは違って下絵を絵具で研ぎ立ての漆の上に描き、その上に白描と同様の尊像を素ぐろめ又は黒漆に近いくろめ漆で線描きを入れる。乾燥してから、今度は下付け漆を普通の描き割り技法で描き、金粉を蒔いて漆で固め、研出蒔絵とする――こんな風に考えられる不思議な技法がみられる原文化財だが、新規復元ではこれを行わなかった。これは今後の研究課題ともいえよう。他の蒔絵、石畳文、七宝繋文など二本の柱をあわせるとかなりの蒔絵坪数になるので何人かの蒔絵飾の方々が分業で作業を進めた。尊像も手足、尊顔等手分けして描き上げた。この復元巻柱の螺鈿も全部内陣同様片岡氏に依頼して製作したが、この時すでに氏は七十才台の中頃だったと思うが、麻布の自宅工房へ復元図と螺鈿の摺貝を持参した時のことである。健康のことが話題になると、氏は私の顔を

見ながら「貝は娘二人が手伝っているから心配しないでいいョ」といわれて、浅草生れの江戸ッ子の氏らしく、私が螺鈿や蒔絵のことなど細かく聞こうとすると「小西さん、人間国宝になりたいの?!」などと気さくにひやかしながら良く教えて下さった。

漆芸復元を終えた巻柱は、螺鈿の毛彫、玉装そして金銅金具を打った。それらは前方二本の巻柱とバランスがとれるように進めたが、連珠文帯金具は工事々務所から出た見本に合わせて餝師が作った。前方二本の原文化財の金具とは違っていた。

中央、南北須弥壇高欄の復元製作の内、南北壇の仕様は保存修理を行った内法長押や斗栱同様にダイタイ彫りの上に螺鈿、沃懸地であったので同様の手法で完成させた。それに比較して中央壇高欄は金色堂では他にみられない技法で製作したので、それについて略記する。中央壇高欄は実に特筆すべきもので、素地をヒバ材で作った上に、当時は大変貴重な輸入材であった紫檀を薄く板状に加工して表全面に貼る、いわゆる練り付けをしていたのである。遠方から見ると中央、南北壇の高欄が余り違わず見えるかも知れないが、一番大きな違いは、紫檀加飾に薄い棒状の象牙を陵線（東、地覆などの角にあたる）部分に象嵌しているので、高欄の姿が非常にはっきり見えることだ。宝相華文を螺鈿で彫り象嵌して玉装する。架木、平桁などの木口は金銅金具を打つという大変手のこんだ仕様であったが、これだけ多種多様な装飾をしても全くイヤ味ひとつない美意識は一体何からくるものか。内陣や巻柱の保存修理をしながらも考えたことである。このように新規高欄を製作しても全く同感であったことが不思議でならない。

紫檀貼りの高欄の架木は正背面が六角、左右南北面が八角で作り同様に螺鈿象嵌を施す。これら三基の高欄は残存していたが、紫檀、螺鈿そして沃懸地が殆ど欠失してしまったため、それらは別途保管することが決まり、新たに復元が決定したものである。三基の高欄も仕様の通り完成して、須弥壇の上に納められると全体のバランスが良

く、格狭間の孔雀や上下框の宝相華文などと大変調和がとれた設計に仕上げられていることがわかる。

復元模造の話はかけ足だったが、工事が完成して約三十年が経過、改めて復元した後方二本の巻柱と原文化財を比較して感じたことを少々述べてみたい。

① 全体的に蒔絵の仕上げ、特に炭研ぎ、艶出しなど少々キレイにあげすぎたきらいがある。それは、幾分江戸、明治的技術感覚であったか。

② 蒔絵尊像の描き割りの線の幅に少々振幅があれば良かったのではないか。

③ 尊像光背の白銅金具は艶を少し押さえた方が良かった。

④ 復元した中央壇高欄の紫檀螺鈿象嵌の作業は現地の工事事務所で加工したものである。工事の終盤、螺鈿象嵌の製作は工期的に無理、と五十嵐主任にお伝えしたところ切り抜いた螺鈿を工事事務所へ送るように依頼された。中央壇高欄は、最終的に金銅金具を除いて現地事務所で螺鈿象嵌の作業をしたようだが、仕上がったものを見るとやはり象嵌を急いだようで文様と紫檀の彫りに粗雑さが目立つ。

⑤ 巻柱や中央壇高欄の復元を考えると、双方とも後半は工期の残りが少なくなり、特に高欄はやや急ぎ過ぎた嫌いがあり、残念である。

また、これら巻柱などと並行して1／5金色堂の製作を進めていたが、これについては国宝金色堂漆芸、金箔関連の工事ではないので、別の機会にゆずることにする。

こゝで、金色堂漆芸・金工、工事全体を振り返ってみると、天下注目の「国宝中尊寺金色堂修理工事」だっただけに、これに関係した多くの方々、委員、漆芸技術者、文様画師そして監理者などの意見、解釈等の相違による論議、対立そして難題が少なからず出ていたのである。そのひとつに、

文様復元に盡力された田口、山崎両氏の場合、前者は蒔絵師、後者は文様画師、それぞれ蒔絵と彩色文様を専門とする一流の仕事と天才的なひらめきをもったご両人だったが、技法、文様の構成など違う世界であるだけに最後まで意見のくい違いが残ったようだ。最終的には松田委員の仲裁で結論に至ったようだが、後々まで山崎氏はしこりが残っていたらしく、同委員の仕事を決して良く言ってなかったのを思いだす。

また、大場、田口そして山崎の三氏が漆芸工事が終って異口同音に語っていたことがある。建築史家の委員の方々は蒔絵、螺鈿、沃懸地そして漆塗り等の漆芸装飾や彩色技法、文様復元を軽く見る傾向が強い、という。金色堂内陣着工当時は委員諸氏にいろいろと説明するのに苦労したようで、漆、蒔絵或は文様などを良く理解していない方が居られたらしい。重ねて数回説明を受けて、工人達の仕事を見ながら漆芸や文様復元の仕事が如何にめんどうで手間と神経を使う難しい仕事か、を理解するようになった、と三氏とも同じことを別々に語っておられた。これは長い間、父も含めて私が数多くの文化財建造物の漆工や極彩色の仕事をしてきて全く一致する点だった。勿論、これら工芸的、絵画的な仕事に理解を示す委員や監督者を知ってはいるが、ごく単純にいえば建築は土台、柱と横材そして屋根があればよし、ということで、そこに加飾してある塗り（丹、漆、極彩色、壁画、蒔絵そして螺鈿など）はなくても建築の役目をはたす。それ以外はいわばつけたり、という解釈、御認識であった。少々極端な表現になったが、それが一種の伝統?!になっているような印象も受けるのである。極彩色や壁画、漆塗そして蒔絵などの装飾は専門外であるから、そこに深入りしても仕様がない、ということであったろうか。

金色堂工事は、こうして紆余曲折をへながらも、松田、溝口両委員や、担当した工人そして五十嵐主任のご努力もあり、委員の方々の総力でもって、これだけ大きな成果をあげ得た、世紀の大修理、事業として立派になし得たものと思う。（了）

〔注〕

注1当時文化庁の前身は、文部省の中に文化財保護委員会事務局建物課があった。

2慶安二年建立、三社祭りで知られる。

3東京国立博物館。

4極めて濃く強い緑青、群青そして本朱などの絵具を使いはなやかで、こまかないろどりをして文様、絵様を描く。例、繧繝彩色。

5上代から金、銀の粗い粉を密に蒔いたのを沃懸地、後世金地という。平塵、塵地は疎に粉を蒔いた仕上げをいう。

6金色堂修理の時に生まれた言葉で薄赤色の錆漆（細かい下地）をこう呼称した。

7臭化メチルなどで木部に潜むジバン虫を殺除する。

8正確な時代は不明だが、欠失した内陣前方へ後方の螺鈿文様を移して付けたもの。大半が明治修理の時だと推察される。

9透明なもの（ガラス、水牛の角の薄板）、瑇瑁（海亀の甲ら、べっこう等）又は透しを入れた金銅金具などの下に彩色をして文様をみせるようにしたもの。

10塩化ビニール系の油性塗料で粘着性がある。

11巻貝である夜光貝を場所に応じた大きさに切断してほゞ一定の厚みに、表裏を平滑に摺ったもの。

12奥野貝細工製作所。大阪の泉南には当時はかなりの数の貝細工（摺貝などの加工）工場があったが、現在では二軒ほどだという。

13明治二十二年～昭和五十二年（一八八九～九七七）螺鈿を父善次郎、蒔絵を川之辺一朝に師事。当代螺鈿の第一人者で長い間松田権六作品の中の螺鈿は殆ど氏の仕事だったという。芝山師。

14祖父佐次郎の時代には白山松哉（帝室技芸員）、父徳次郎の時は高野松山（人間国宝）など白山派の蒔絵飾が金粉などをよく注文したという。

15蒔絵に使う金粉は殆ど鑢でおろして（たまおろし）それをまるめたりひらたくするが、おろして丸めずに粗目の篩にかけてふるった金、銀そして小判（青金）などの粉。平安時代に沃懸地、塵地によく使われた。

16純金のこと。

17金に銀を合金する。

18後に重要無形文化財（人間国宝）蒔絵の保持者に認定される。大正5年～（一九一六～）。

19 18と同様であるが後に東京芸術大学漆芸科教授となり、現在同大名誉教授。大正十二年～（一九二三～）。

20明治三十三年～昭和五十年（一九〇〇～一九七五）

植松包美の弟子と聞く。昭和五十年まで東博内漆工修理室で国宝修理（漆芸）を行っていた。蒔絵師。

21蒔絵や沈金の技法とは別に、漆塗り、漆下地を含めた漆塗りの呼称。

22繧繝彩色文様、特に平安時代の文様復元、画師としては第一人者で平等院鳳凰堂極彩色文様は氏が復元した。文化庁選定保存技術者。文様画師。昭和二年～平成五年（一九二九～一九九三）。

23一般に漆下地を厚く付けると表面だけ乾燥し蓋をした状態になって中が未乾燥の状態になるのを云う。中尊寺地の粉は余程の厚付けさえしなければウムことはなかった。

24瑠璃――ガラスの古稱であるが、小さくまるいガラス玉を象嵌した呼稱。

25孔雀石（マラカイト）の色が濃い部分を粉末にした深い緑色の絵具。

26大正五年～、（一九一六～）永年日光廟の建築漆工及極彩色の漆工に携わる。他に伊勢神宮神宝調製も行い建築と工芸両方の漆工をこなす数少ない名人の一人。㈱小西美術工藝社に在籍した。後年黄授褒章受章。

27明治四十年～昭和四十九年、（一九〇七～一九七四）永年日光廟の極彩色金箔の仕事に携わり、1―5金色堂の金箔も担当。装潢師、金箔師として㈱小西美術工藝社に在籍し、金箔押しの名人として後進の指導にあたっていた。

28金箔を打った時に丸味のある四角になるので、正方形に断ち落した時出る三日月形の切れ箔。

29金箔を押す直前の漆塗りでこの漆の艶がそのまゝ箔の艶になる大事な工程。金色堂は床にだけ塗り、他の部分は在来の漆塗に漆を含浸させ、表面を薄く固めてこれを箔下とした。

30透漆であるが艶を出すために植物性の油が入った塗りたて漆。

31べっこう。薄茶の半透明な素材。

32表現したい線を残して両側の面を描く蒔絵技法。巻柱では尊像、宝相華唐草文様にみられる。

33熱帯に産する暗赤色のうつくしい堅木。天平時代の作品が正倉院にある。

◎写真提供、朝日新聞社、河出書房新社、第一法規出版、中尊寺、中里壽克（五十音順、敬称略）

金色堂國寶指定百年記念祭・記念講演

みちのく――文学とこころ

歌人のみちのく

馬　場　あき子

馬場あき子でございます。

ただ今は、素晴らしい「声明（しょうみょう）」、感動いたしました。が、それに続いて中尊寺藤原氏四代の御遺体の調査の記録映画を拝見しました。実は、私、この記録映画は三回目なんです。最初、昭和二十五年に撮られた、その当時拝見しまして、それから中尊寺へ参拝した折りに一度拝見して、そして今回と、三回拝見したのですが、今日が一番感動いたしました。それはどうしてなのだろうかと思いましたら、やっぱりあの雪の霏々と降る寒い寒いみちのくの雪の中を、初めてそのお棺が金色堂を出られるところ、あそこに戦慄が走るような畏れというか、神韻というか、亡き人のもうミイラになってらっしゃる方ですのに、その人のなんか

生きている魂のようなものが響き出たような、そんな感銘をいたしまして、いやー、これはもう今日はすごいものを拝聴し、拝見し、そして今、千田貫首さまのお話で、私が少しばかり知識として持ってた清衡のことを、もっと詳しくお話になってしまわれたので、もう帰りたいような気持ちが本音でございますけれど、まあ少し責めを果たしたいと思います。

私は、中尊寺に初めて参りましたのは、今皆さん観光バスで、スーッと上のほうまで上がっておいでだと思いますけれど、私は昭和二十一年、つまり、戦争に敗北しました翌年の夏に行っております。まだ十八歳という学生の時でした。それは私の祖母が、宮城県の沢辺村というところに疎開して住み着いてしまいましたので、その祖母を見舞いがてら口減らしに、みちのくに一夏、夏休み中行ってたわけなのですが、そのころはみんな食べるのに精いっぱいで、全国のお寺なんていうものは、誰も行く人がいませんでしたので、まあ私は暇があったので、空き腹を抱えながらではありましたが、みちのくのお寺を幾つか見て回りました。そのとき中尊寺に参りまして、杉木立の急な月見坂を、ずうっと登って行って、そして光堂を初めて視たわけなんです。

しかしまあ、学生の知識として知っていたのは、『五月雨の降り残してや光堂』という芭蕉の句なのですけれども、その光堂を実際に見ましたらば、あまりのその落差といいますか、なんというみすぼらしい、これが金色堂なのかと思って、芭蕉が見た光というのは、果たしてどの程度のどんな光だったんだろうかというようなことに、不思議な違和感を感じたものでした。

話が飛ぶようですが、その沢辺村からそれほど遠くないところに栗原郡というのがありまして、今は金成町と言ってるところなんですけれども、その金成町に「姉歯の松」という歌枕があるんです。そこで私の叔母たちが、「お前も国文学の生徒なんだから、行って見てこい」というので、光堂を見て帰りましたあと、その「姉歯の松」という歌枕を訪ねたんです。今から十年ほど前に再訪しましたところが、もう本当に開けて、ここが往年の「姉歯の松」か、と驚いたんですけれども、この姉歯の松は、実は在原業平（八二五～八八〇）の旧跡だということになっています。それは『伊勢物語』の十四段に、こういう歌があります。

栗原のあねはの松の人ならば
　　都のつとにいざといはましを

という歌なんですね。栗原のあねはの松が、もし人であったならば、都に帰る時に、「さぁ、一緒に行こうよ」と誘いたいんだけれども、――どうも誘い切れないでいるという歌なんです。

『伊勢物語』を見ますと、実は業平は、隅田川の都鳥を歌ったあと、みちのくに向かった、そんなことはないんですよ。そんなことないんですけれども、そのころから都からはぶれた人、都にいても出世もできず、前途の希望もなく、藤原氏という強大な貴族が全権力でもって都を制圧していますから、そこに気に入られなければ出世ができない。気に入られたとしても身分が決まっているので、それでたとえば五位とか六位までしか上れない家、そういうような身分制度が固定していましたために、絶望をした人たちは、東国の新天地を求めて、東を志向する、また東よりももっとも っと物産の豊かな陸奥の国守になることに賭けるという、そういう人たちもいたわけなんです。

そのころの東国というのは、都びとにとってはほとんど未見の新天地でしたけれども、道の奥は東国よりも、もっと物産が豊かな新天地と想像されていたかもしれません。武蔵守が任期が果てて、京都に帰る時と、陸奥の国守が任期が果てて、京に帰る時と、どっちのほうの行列が立派だったかということを考えてみれば、すぐわかることです。山海の産物に、田畑は豊穣ですし、その上砂金が採れる、上等の馬の牧がある。

たとえば、王朝の能因法師という人が、陸奥に二回くらい行ってますけれども、その能因法師の初度の下向は、陸奥の歌枕を見に行ったんだと言ってるけれど、実は馬の買い付けに行ったんじゃないか、という見方もあるくらいなんですね。そんなふうに陸奥は上等の馬の産地でした。そして、

何よりも砂金ですね。砂金の国、黄金の国だったわけです。これは万葉以来そうですね、『万葉集』にも歌われているとおりです。

それで、都では出世を望むべくもない下級貴族たちが、あえて陸奥を志す、そういう人たちが、かなりあったようです。能因は出家をしてから行ったのですけれども、たとえばまた、天皇家の血筋を引く、自分は尊い血筋の人間であると自覚しながら、位はちっとも進まない平兼盛とか、源重之とか、そういう人たちは東国に流れる。そしてみちのくを目指す。たとえば源重之は、衣川の関の長とも交流があり、かなり足を伸ばして各地に出かけているらしい。この人は、清和天皇の系譜でありますけれども、一家して福島県の今の安達が原黒塚あたりに住み着いて、もう都に帰る意思をなくしてしまった。そこにまた、光孝天皇の系譜の平の姓を貰った兼盛がやってきて、源重之の妹に歌を送ったりしています。

みちのくの安達の原の黒づかに
鬼こもれりと聞くはまことか

という有名な歌がありまして、陸奥の安達が原に鬼が籠(こ)もっているというのは誠かという。これはいわゆるわれわれの考えている鬼じゃなくて、隠語、つまり、「鬼」というのは人に顔を見せない隠れているもの、言ってみると、すごく高貴なもの、神みたいなもの、素晴らしく美しいものもみんな、隠語として「鬼」と呼んだわけですね。鬼は人に隠れて見えない、だから人に隠れて見えないものを鬼と言ったと、『倭名類聚鈔(わみょうるいじゅうしょう)』というわが国最初の辞書に書いてありますけれど、そういう美しい女のことを、あえて「鬼」と呼んでいるわけです。

ですから「みちのくの安達の原の黒づかに鬼こもれりと聞くはまことか」というのは、恋文なわけなんです。そういう恋文を出したけれど、重之は、「この妹はまだ子供すぎて、あなたの嫁には不十分だ」と言って、ついにくれなかったんですけれども、この物語も幾つか発展を遂げております。

前の業平の話に戻りますと、業平はそういうふ

うに言って、みちのくの栗原まで流浪して行ったということになっているんですが、実際はそんなことはない。東のほうに下ったというのも、果たしてどこまで下ったのかと言われているくらいです。たとえば能因法師なども、二回も実際みちのくに下っているのですけれど、

都をば霞とともに立ちしかど
秋風ぞ吹く白河の関

という歌を残しているんですね。ところがこの歌で見ますと、都を霞のころ、つまり、春ですね、都をば霞とともに立ちしかど、春に出立したのだけれど、秋風ぞ吹く白河の関、白河の関に着いた時は、もう秋風が吹いている。そうするとその当時、京の都から、白河の関までの日程は、約五ヵ月から六ヵ月かかって到着するという、すごい遠い国であったわけです。つまり、今二十四時間かかればブラジルまで行けるわけですから、五ヵ月かけて行くところって、めったにないわけですね。それだけ遠い国ですから、ほぼ異国的な雰囲気があったんじゃないだろうか。東でさえも、遠い遠い国であって、業平は自分が自ら犯した罪というか、好色の咎を自ら感じて、というのは清和天皇のお妃に予定されていた藤原高子という方を恋人に持っていて、そしてその関係が断ち切れなかったことや、伊勢の斎宮と一夜共寝したという、そういうようなことが数々評判になって、自らそのみちのくに流離して行ったんだと言われていますが、目崎徳衛氏は、業平の『伊勢物語』を見ると、東の国に「一人、二人して行きけり」と、一人か二人の友だちと一緒に行ったんだと言っているけど、そんなことは嘘で、その一人、二人の友だちが、多分何十人かぐらいお供を連れて、一行は五十人から六十人くらいもいたんじゃないかといっています。

しかし、『伊勢物語』を見ますと、「昔、男、みちの国にすゞろに行きいたりにけり」と書いてあります。「すゞろに」というのは、なんとなくという意味なんですけど、そんな五ヵ月も、六ヵ月もかかる「道の奥」(陸奥)まで、なんとなく行くなんていうことは絶対考えられないわけですか

ら、その理由を「すぐろに」というふうに誤魔化して言ってるわけです。

業平は、そうした人物のことをこんなふうに言ってる。「身を益なきものに思ひなして」つまり、わが身を、都ではもう用事がないものだ、誰からも省みられないものだと思いなして、それでは「京にはをらじ、東の方に、すむべきところもとめむとて、往きけり」というふうに東下りの気持ちを述べています。

ということは、これは唐木順三氏が、詳しくお書きになっていらっしゃる。身を用なきものに思いなす人たちが、そのころ都には非常に多かった。藤原氏の圧政と権力と財力が、いかに大きかったかということですけれども、「身を益なきものに思いなして」もう都にいてもしようがない、でも自分の血筋は高い、才能もある、技術も持っている、そういう能力のある人たちが、東のほうに自分を珍重してくれる国を求めてどんどん東海道を下って行ったんだと、そういうことなんです。

ところで金色堂は天治元年（一一二四）に清衡によって建立された。これは明治三十年の改修の時に屋根の棟木墨書銘でわかったんですけれども、清衡が、自分が死後ずうっと住んでいるべき小宇宙としてお建てになった聖地であったわけなんですね。清衡は、金色堂を建てると四年くらい後に亡くなってしまいます。

そのころ都ではどうだったんだろうかといいますと、都は白河院の院政の時代で、崇徳天皇が位に就いて、まだ間もないころだったので、比較的平穏な時代ではありました。しかし近年、中尊寺を中心として毛越寺とか、いろいろの方が平泉文化がどのぐらいの繁栄をして、奥州にどのぐらいの文化が広がっていたのか、その実態を掘り起こそうということに、大変情熱を持っていられまして、学問的な資料も沢山発見されてまいりまして、十二世紀を中心とする奥州文化にかけた人々の歴史というものが、京都を中心とした貴族文化に対する、ある対応的な気分を持っていたに違いないというようなことが考えられるようになってきました。京都の文化は確かに優れたものですけど、

京都という地はちっちゃいです。そこにいっぱい文化が密集している、そこにたくさんの仏教文化が生まれています。けれどその貴族たちが、必要とする美術家、つまり、彫刻師、絵師、それから書家だとか、そのほかそういう沢山の仏教文化を創り出す担い手というのは、限られてきます。

またそういう文化人の中にも、貴族の中にも、京からあぶれてしまった優れた才能がみちのくを目指すということもあったわけなんですけれど、金色堂のような第一級の国宝をどのようにして清衡が、どのような方達を都から招いて建てたのか。そういうようなことも非常に興味深いことです。たぶん、都ではできない賭けを匠（たくみ）たちはその腕に信じたのかもしれません。しかし、いずれにしても、陸奥の文化の性格というのは、京都の文化のように簡単に解明できない情念というものがあるように、私は思います。

実はさっき貫首様が会津の話をなさいましたけれど、私、たまたま旅をしまして、会津の青年会が会議をしているその隣の部屋でごはんを食べてたんです。そうすると、会津の青年会の人々が、「戊辰戦争から百年も経ったので、もうそろそろ仲よくしようじゃないかという使節を、長州から派遣してくるというが、どうすべえか」と話し合っていた。それをたまたま聞いちゃったんですね。そこで、みんなが言う結論は、「たった百年でご先祖の恨みを忘れたとあっては、申しわけない」と言うんです。それで「今回はやめるべえ」ということになって、長州との講和条約を蹴った、その場面の隣に襖一つ隔てて、私がいた生き証人になっているわけなんですけれども、これが会津魂であると同時に、私はやっぱり東北魂のような感じがするんです。

確かに戊辰の役のあと、明治政府は長州が頑張っていましたから、東北にはろくなことがなかったし、会津は東北本線も通らないし、もう会津はしけちゃおうというので、もう古く古く生きていこうという方針を立てて、町の旦那衆は、「会津はもう古くなってやる」という決意をしたというくらいなんですけれども、とにかく長州という名

前を聞いただけで大変なのが会津なんです。たった百年でもそのとおりなのですが、こういう記憶というのは、なんか民族の記憶みたいなものは、ずうっと長く長く残っていくだろうと思うんです。

清衡という人は、非常にご苦労をなさった方なので、状況を見るということにとても優れていた方だったと思います。前九年の役が終わったあと、清原清衡が幼少の日から非常に苦労して育った清原家内部の紛争が起きたのが、後三年の役なのですけれども、これに鎮守府将軍兼陸奥守の源義家が介入をしてくる。幸いにも義家の信任を得て清原氏の棟梁となるわけです。この清衡という方は、人を見る目というものがとても立派だった方だと思うんですが、名もなき一人の僧の勧めによって、中尊寺を創建しようという決意を固める。有名、無名を問わないで、人間、人物というものを見る目を持っていらっしゃったんだと思うんですね。

ここでは源義家という人物を、見抜いたんだと思うんです。そしていち早く、この清衡は義家に誼(よしみ)を通じるんですね。そして、同族の清原氏を滅ぼして、そして清原氏は、いわば清衡のものになったんです。その功績によって、清衡は陸奥押領使になる。義家は都に引き返すわけです。清衡は都の関白家、摂政家ともどんどん交際が生まれて、そして文化が輸入されてくるわけです。みちのくでは、芸術家が行けば、うんといい給料をくださるし、上等の材料も購入して、いいものをつくらせてくれるとなると、芸術家はみちのくを目指すということになる。

実際、平泉だけじゃなくて、私は福島なんですけれど、福島県にもいい仏さんがいっぱいあるんです。権力の中心である京都はつねに戦争の渦中に陥りやすかったので、古い時代の美術品がどんどん焼失してしまう。

ところが陸奥には残っている。その当時の京都文化の仏像を調べるには、中尊寺はもちろんですけれども、福島県でもかなり調べられるという状態なのです。他県でもそうなのではないでしょう

か。

清衡は陸奥をほぼ自分の掌中に入れた時に、その中心に、信仰の中心がなければ駄目だというので、庶民を吸収できる信仰の中心として中尊寺を創建して、そしてそこにたくさんの堂塔を、僧坊を建て、文化を集積した。仏教文化です。彫刻も、絵画も、音律声明も、これは後に日本の芸術の大きな母胎になったものばっかりで、能楽なんかも、仏教行事の直会で行なわれた。そういう芸能もまた発達してきたのです。

そういうようなわけですから、平泉文化が芸術が、どんどん高まる、建築も、今のような仏像も、金色堂のようなものも建てれば、当然絹の文化も、染めの文化も、それを着る人の生活文化も、芸能の文化も、そしてたぶん、文学、言葉の文化もあったに違いないのです。そういう東北の史都が滅亡し潰れてしまったということは、とっても残念なんです。言葉の文化があったに違いない、そう私が思いますのは、たとえば前九年の役で安倍氏を、源頼義・義家が攻めるわけなんですけれど、義家は衣川の柵に、安倍氏の長男貞任を追い詰める。そして衣川柵は破れるわけです。そのとき馬に乗って敗走していく安倍貞任を後ろから、勝者の義家が追っかけながら

衣のたてはほころびにけり

と詠んだんですね（『古今著文集』九）。これ、七七なんですよ。五七五のあとに七七つけるのはやさしいんですけどね。七七詠まれて五七五付けるの難しいですよ。義家は都の侍で、摂関家の貴族とつき合ってる人間ですから、結構うまいんですね。場所は衣川である、その衣川の縁語を使って、「たて」つまり「館」であり、同時に着物の経糸(たて)ですね、「着物を織っている経糸は、もう綻(ほころ)びて破れてしまったぞ」とこういうふうに叫んだんですね。「お前の負け戦だ」とは怒鳴らないで「衣のたてはほころびにけり」、優雅な戦争ですねえ。そうすると早く逃げちゃえばいいのに、馬を停めて、貞任が言ったんですよね。

年をへし糸のみだれのくるしさに

これ、どっちがうまいかなあと、歌人の因果で考

えちゃうんですよね。そうすると「衣のたてはほころびにけり」というのは、勝ちに乗じて走ってた人間としては、言いやすい言葉ですよ。けれど負けてた人間が言われて、馬を停めて、「年をへし糸のみだれれのくるしさに」って言えたということは、貞任はなかなかの歌人だったんじゃないかと思うんですけど、そういうふうに答えた。これは明らかに陸奥に和歌文学が、もう深く根ざしていて、そして義家もそれを知ってたし、それから貞任も心得ていた。それで「年をへし糸のみだれのくるしさに衣のたてはほころびにけり」長年着慣れて糸が乱れてしまった、苦しいさまざまな縺れから、衣川の館は、なるほど陥落してしまったというわけなんですけれども、こういうような応答をしている。

貞任の弟は宗任という人ですが、これは生け捕りになりまして、俘囚として都に連れてこられる。そして陸奥に在れば大将軍なのに、ほんの惨めな雑役に従わされていた。殿上人は、陸奥という辺鄙な遠国から田舎者がやってきたというので、梅の枝を一本折って、その宗任の鼻先に「いかが見る」と言って、突きつけたわけですね。「都には春になると文雅な梅が咲くんだ、みちのくに梅の風流心はあるかな」と、ここには陸奥に対するきわめて過酷な蔑みの思いがある。ところが宗任は、それを見ると、

わが国の梅の花とはみつれども
大宮人はいかが見るらん

と即座に答えたんですね。これは歌としては簡単ですよ。これはわが故国では梅の花と詠みますが、大宮人はいかが見るらん。なんか別の花として歌を詠みますか。つまり、陸奥をそれほど馬鹿にするのじゃないよという、侮蔑する者に対する侮蔑というものがある。そういう抵抗的な歌なんじゃないかと思うんですよね。

私、このあいだ中尊寺を拝見に上がった時、どういうものか「やまびこ」とか、東北へ発つ新幹線は、みんなあっちこっちが錆びてるんですよ。私は、これが気に入らない。こういう歌を詠んだんですよ。「中古車を東北に回す思想死なず我に

北狄の魂死なず」と言ってね、このあいだ山梨の文学館で「歌の宴」というのがあった時に、その話をしましたらば、みんながゲラゲラ笑って、「もう馬場さんは、すぐこれなんだから、あれは雪で錆びるんだよ」と言うんですよね。なるほど雪や雨で錆びるかもしれないけれど、私にとってみると、どうも東北に中古車を回してるんじゃないか、とひがみまして、それで東北に中古車を回す思想が死なない限り、我に北狄の魂死なずと歌ったんですよ。北狄というのはいい言葉で、私は一生北狄の魂を持っていこうと、思ってるわけなんですけどね、北狄の魂だけじゃ駄目なんですよ。やっぱり北狄は文化を持たないと、単なる北狄になっちゃう。それで北狄の魂の拠り所が、やっぱり中尊寺なんだろうと、それから平泉文化なんだろうと、そういうふうに思うわけなんです。

さっきの能因法師に戻りますと、

都をば霞と共にたちしかど
秋風ぞ吹く白河の関

この白河の関に立った時の感慨無量というのは、まさに遠い国に行って、国境を越える時の気持ちなんです。それでこういう白河の関の歌が、歌枕としては最も大きくいっぱい残されています。これは能因ですけれども、この能因よりもちょっと先でしょうか、兼盛が実際に白河の関を越えた時には、こんなふうに歌っています

便りあらばいかで都へ告げやらむ
けふ白河の関は越えぬと

芭蕉はこのことを感慨深く思い出して、遙か元禄の後世から、この歌詠みの「陸奥」への志を、さまざまにこの白河の関を越える時、書いていますね。「これからは特別な心構えをして旅をするんだぞ」と自分に言い聞かせているわけです。「いかで都へと便り求めしもことわりなり」とか、ここで衣服を改めて、烏帽子を直して越えていった人があるんだけれど、自分はどうやってこの関所を越えようかということが、芭蕉の課題であった。そのぐらい、「みちのく」へ対する芭蕉の思い入れというのは、深かったわけなんですね。芭蕉は、

じゃ白河の関で俳句を残しているかというと、残していない。あまりにも先輩の歌がたくさんあって、気が重くなっちゃって、ついに芭蕉は白河の関が詠めなかった。いや、詠まなかったのだと思うんですけども――。

芭蕉は白河の関を越える前に、芦野の遊行柳のところで休憩をしています。そして

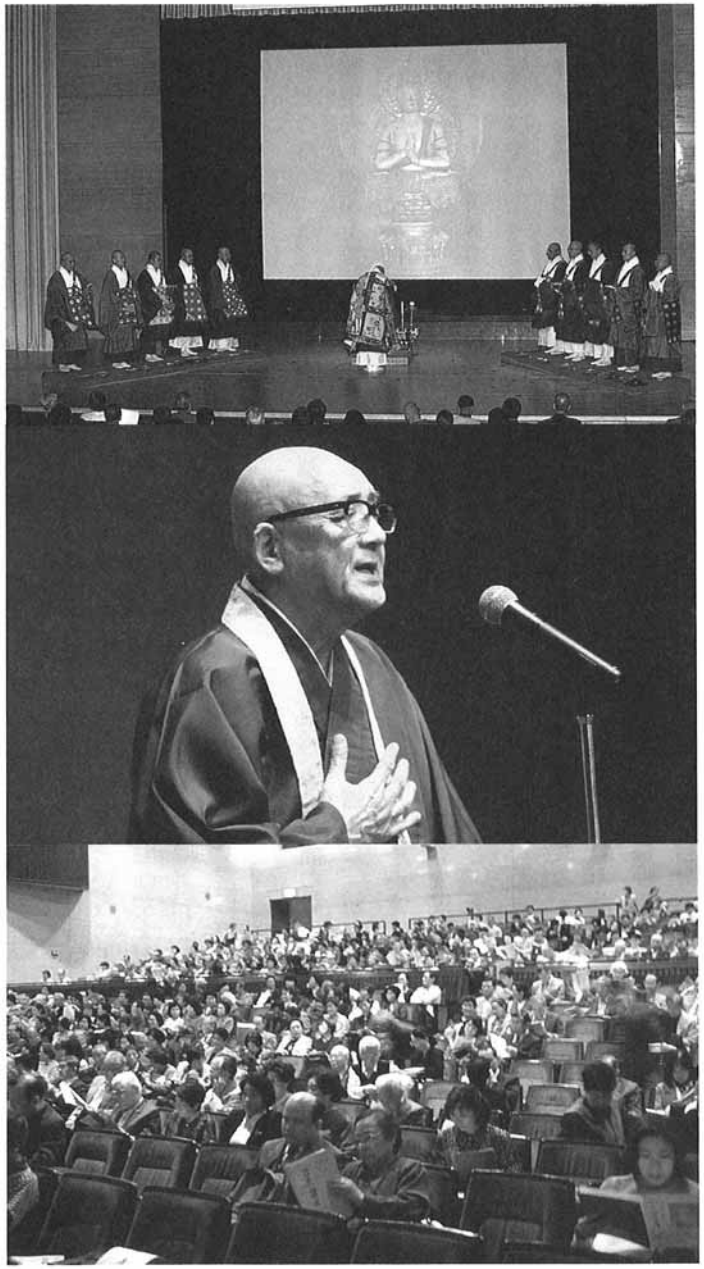
田一枚植ゑて立ち去る柳かな

という句を残しているんですけれども、つまり、芭蕉は、田んぼが一枚植わるあいだ、切り株だか石に座って、じいっとそれを見てたんですね。その当時、田植えなんていうのは、ちっとも珍しいもんじゃありません。それなのになぜ田植えを一枚終わるまで、そこに座ってたんだろうか。

これも独断ですが、私は、どうやって白河の関を越えようか考えてたんじゃないか、そう推測するわけです。白河の関の句は詠まないという越え方もある。先輩への敬意でいっぱいという越え方もあるぞと思って、芭蕉は詠まなかったんだろうと思う。白河の関というのは、みんながどうやって越えるかということを課題にしたくらい、大変な場所だった。それは白河の関が問題なんじゃなくて、そこからが「道の奥」陸奥であるから問題なんですね。

能因が、果してその白河の関に行かないで詠んだか、行って詠んだかということも、ずいぶん問題になることでして、源頼政という武将で歌人がいますけれど、この人は能因の「都をば霞と共にたちしかど秋風ぞ吹く白河の関」というのを真似しまして、「都にはまだ青葉にて見しかども紅葉散りしく白河の関」という歌を歌ったんですね。それで自分で、これは盗作だと思われちゃいけないと思いながらも、なんか捨てがたい歌だったんです。「都をば霞と共にたちしかど」に対して、「都にはまだ青葉にて見しかども」と、季節がちょっと違うだけで、霞か青葉か、片方は「秋風ぞ吹く白河の関」なんですけど、片方は「紅葉散りしく白河の関」、やっぱり五ヵ月か六ヵ月かけて、ちゃんと季節を映している。このことを頼政は、心

配して俊恵法師という人に相談をしたんですね。そうしたら俊恵法師が、「うーん、非常に似ている。似ているけれど、これは出で栄えのする歌だ」



と言うんですね。これはみんなが能因法師の歌を頭に入れているので、じっくり詠むと損をするけど、歌会なんかの席に急に出して、パッと詠んだ

時は、見栄えがして得をする歌だから、出してみなさいと言われたので、それではと言って車に乗って歌会に行って、これを出したところが、見事、今で言えば一等賞なんですが、勝ちの歌になったということがあります。

そんなふうにやっぱり陸奥というと、歌人が緊張するところだった。たとえば左大臣源融(とおる)は、

陸奥のしのぶもぢずり誰ゆゑに
乱れそめにし我ならなくに

と、百人一首で歌っていますね。源融は嵯峨天皇のなんと、十三番目の子なんです。天皇に即位する可能性は絶対ありませんよね。皇位継承者が次々に夭逝(ようせい)(早世・頓死)されたとしても、せいぜい四番目ぐらいまでしょう。後白河天皇は、鳥羽天皇の第四皇子、天皇位継承順位第四位だったんです。とても天皇位に即くはずがない。それが近衛天皇が亡くなられたりして、思いもかけない自分に皇位が回ってきた。それまで後白河天皇は遊びに遊んでいたんですね。放蕩息子だったのに、天皇位が回ってきた。

けれども、このぐらいがせいぜいで、十三番目に皇位が回るということはほとんどないだろうと思う。それで融は左大臣まで位は登ったんですけど、藤原氏の権勢がものすごく強いもんですから、お飾り左大臣で、何にもさせてもらえないんです。それでどうしたかというと、庭園に凝ったんです。陸奥の塩竈の浦の景を庭に写したんですね。そこに難波の浦から、毎日車に何十台となく海の潮を運ばせる、その海水代に財産が全部なくなっちゃうくらいの贅沢をやったんです。それから、何をしたかというと、その潮を汲ませて、塩焼く煙を立てて眺めていたというんですね。巨万の富を蕩尽し、潮にしてみんな焼いてたんですね。

そして、老齢の業平なども、この融の大臣(おとど)の屋敷に入って、毎晩夜遊の宴をやって、憂さ晴らしをしていた。自分は実権のない左大臣だ、そうかと言って、左大臣ですから、都をあけてどっか遠くに往くこともできない。つまり、陸奥の塩竈の浦に左遷された、流謫(るたく)、流人の気持ちを毎日、家

で味わいながら、宴会をやってたという、そういう気持ちなんじゃなかろうか。流され人の気持ちの佗(わび)しさというものを愛する、だから紀貫之だとか、業平だとか、いろいろの歌人が、この融の屋敷に関心を寄せて歌を詠んでいます。

藤原氏というのは権勢が強くて、嵯峨天皇が亡くなったあと、淳和、仁明、文徳、清和とつづき、陽成天皇を排斥して、次の天皇を立てようという時、融の大臣はもう大部老齢で、けれどまだ左大臣でいたんですよ。藤原氏が、すでに臣下に下っていた光孝天皇を擁立した。藤原氏は自分の言うことを聞く天皇を立てたいわけです。そういう零落していた元親王を擁立しようとした時、ついに融の大臣は我慢しかねて、「それくらいなら、この源融もいるぞ」と、ついにひと言叫んだんですけれど、それもかなわぬ抵抗であったわけなんです。

それはそうといたしまして、陸奥へ旅した歌人の中で、将来ともに、つまり、西行法師と芭蕉が最も同情したのは、藤原実方(〜九九八)でした。この藤原実方という人は、左大臣師尹(もろただ)という立派な方のお孫さんなのですけれど、父の定時という人が、非常に若くして亡くなって、叔父の済時(なりとき)という人に養われて、やっと左中将という位まで上った。非常に才能のある方だったんです。この実方と同時代、同じように才能のある書道の大家藤原行成がおりまして、二人とも和歌の天才で、ライバルになるわけです。事あるごとに競争が始まるわけなんですね。

ある時、ちょうど桜狩りが行なわれた時、この実方も桜狩に行ったんですけれども、折悪しく雨が降ってきた。それでみんなが軒の下に入って避難をした、雨に濡れまいとしたんですけれど、実方は一人桜の下にたたずんで濡れてた。そして高らかにみんなに聞こえるように、

桜狩り雨はふりきぬ同じくは
濡るるとも花のかげにくらさむ

どうせ濡れるならば、桜の花の下で濡れようと、びしょ濡れの袖を絞って、その桜の下に立ってた

わけです。それをみんな聞いて、「さすがは実方だ、明日はこれはニュースになる」というので、実方の「桜狩雨は降りきぬ濡るるとも」を、みんな懐紙に書いて、翌朝出勤したんです。そしてそのことを天皇の前で、誰かが披露した。すると、行成がいて、「歌は面白し、ただし、実方は烏滸なり」（『撰集抄』）、烏滸はおこがましいの烏滸、痴れ者ということなんですけど、そういうふうに言ったんですね。みんなげんなりして口をつぐんでしまった。実方は面白くなくてしようがないので、心の中がもやもやしてる。

それである時口論になった折に、思わず持ってた笏でもって、行成の頭を殴ってしまった。昔のお公家さんでも、そういう人いたんですね。そうすると行成の頭から、冠が落ちて転がって、清涼殿の庭に落ちた。当時は、冠が落ちた頭というのは、丸裸よりも恥ずかしいこととされていたらしいんです。それでみんなは真っ青になった。

ところが行成は、平然として立ち居振る舞い正しく、清涼殿の正面の床をおりて冠を拾って、それを袖で払って片隅に行ってその冠を被り直した。それをまた幸か不幸か、清涼殿の月形の窓の、その向こうに天皇がいらして、その状況をこう見てたわけなんですね。それで行成用ふべきものなりということになって、それからこの実方は、陸奥の国守に左遷されるわけなんです。そのとき一条天皇が労わり深い言葉なんですけれど、実方に陸奥国の歌枕見てまいれと仰せられたんですね。こんな餞別の言葉をいただく人って、めったにないわけです。陸奥には歌枕がいっぱいある。その歌枕を実際に見てくるがいい、そうすれば四年経って都に帰った時、お前は陸奥の歌枕の専門家として尊重されるよ、という気持ちがきっとあったんでしょうね。そのころ一条天皇の時代、すでに陸奥というところはそのぐらい魅力のあるところだった、赴くのは苦労だけれど、歌枕を見に往く人があれば、都に帰ってきて、たちまち称賛を浴びることができる、そういうところだったということが言えるんじゃないかと思うんです。

実方はどうしたか。いろいろ歌を詠みながら、

道の奥に行き、陸奥守に赴任してからも、出羽の国に行ったり、いろいろなところに出掛けて、天皇の仰せのとおりに、歌枕で歌をつくっています。けれど任期がもうあとちょっとで終わるという時（長徳四年十一月）、遊山、やっぱり歌枕に行ったのかもしれませんが、陸奥の土俗の女神の祠があった。そこのところで土地の人は、全部馬からおりて、手を合わせるんですけれども、この実方は、何の一地方の土俗神がと軽く思って、そのまま馬で通りすぎたところ、馬が急に狂い出して、落馬して死んでしまったんです。気の毒に、実方は都に帰れなかった。実際今、そこの所に実方の墓が、残っているんですね。

西行（一一一八～九〇）もまた二度みちのくに行っています。西行が目指したのは、二度ながら、この平泉でした。第一回に平泉を目指した時は、みちのくの歌枕を、それこそ見に行った。大体三十歳ぐらいのころの西行ですから、出家して何年か目で、心も落ちついて、みちのくの歌枕を見に行こうというのが目的だったというのですけれど、それは措いときまして、西行はこの実方のお墓の前を通った。

私も実際そこに行きました。旧の在来線の岩沼という駅から八キロぐらい入った所です。私が道を尋ねますと、土地の人というのは、「この道真っすぐ、すぐそこだ」というものですから、「ああ、そうですか」と言って、歩いて行った。それが、行っても、行ってもないのです。途中でまた尋ねますと、「ああ、そこだ」と言うんで、もう歩いて、歩いて、もう足が棒になるほど歩いたころに、やっと左に曲がる道があって、鬱蒼たる竹藪のそのまた奥に、実方の墓は在ったんです。暗い陰気な苔むしたお墓でした。〝中将実方朝臣の墓〟と書いてありました。土地では、国司祭というのを営んで、今もちゃんとお祭りしてくれてるんです。ここが陸奥びとのいいとこなんですよね。人情が厚くて——。西行は感動して、そして

朽ちもせぬその名ばかりを留め置て
枯野の薄形見にぞ見る

という歌を、そこで詠んでいます（『山家集』）。この歌はいい歌で、西行の中でも出色の歌だと思います。「朽ちもせぬその名ばかりを留めおきて」実方という名前がもう彫られていたんでしょうか。実方という名前だけを、このお墓にとどめておいて、その主は亡くて、「枯野の薄形見にぞ見る」枯野のすすきだけがそよいでいる。そういうものを西行はじいっと見ている。一人の人間の、いわば「終わり方」、人間はどうやって終わるものなんだろうか。今も昔も人間は「終わり方」というものが大事だと思いますけど、西行はこの実方の墓の前で一人の人間の終わり方というものを、やっぱり考えたんじゃないだろうか。私は、西行の旅というのは、歌枕の旅というのは、有名な歌があった場所、場所を歩くんですけれども、そういう単に風景を見ていたんじゃなくて、そこで歌を詠んだ人、あるいはそこを通った人の人生とか生き方というものを考えながら、陸奥へ向かったものじゃないか。単なる趣味人の風流ではない。もっと激しいものがあったんじゃないだろうか。それはこの実方の墓で詠んだ一首を見ても、そこに芭蕉と通うものがあるんですね。

ところが、『奥の細道』では、芭蕉は嘘をかいているんです。芭蕉は実方の墓が見つからなかったらしい。ちょうど季節は五月雨のころで、雨が降って足もとが悪かった。この辺だとは聞いたけれども、なかなか見つからない。そのあたりを笠嶋と呼んでいた。そこで芭蕉は、実方の墓に行ったような顔をして、

笠嶋はいづこさ月のぬかり道（五）

という句を残しています。けれど芭蕉は、昨今の研究によりますと、どうやら実方の墓には行ってない。行ってなくても、そこで句を詠むというのは、一つの手向（たむ）けであったろう。単なる挨拶じゃなくて、どうも芭蕉の『奥の細道』というのは、西行と同じように人の心に会いたいという、単なる歌枕の旅ではなかったように私は思うんですね。芭蕉はやはり、実方の無念と、不本意な死に方をしてしまった実方に対する西行の歌に、自分の句を重ねたかった。それで「笠嶋はいづこさ月

のぬかり道」、ずうっと探して歩いている自分の姿を、ここで歌ったけれど、ついに笠島のあたりを通っただけで、実方の墓には会わなかった。けれど志は、実方の墓に参拝したかったんだ、そういう芭蕉の気持ちだけは残っているわけなんです。

話を戻しますと、それから西行は平泉に行きます。ここも非常に印象的なところでして、こう書いてあるんです。西行が平泉に着いたのは、十月の十二日、陰暦ですから、今でいうともう冬の雪が降り初めるころだったと思います。「平泉に罷着きたりけるに、雪降り、嵐激しく、殊の外に荒れたりけり」すごい天候だった。しかし、西行は、「いつしか衣河見まほしくて罷りむかひて見けり――」というんですね。早く衣川が見たくて、平泉に着くや否や、吹雪をついて真っ先に急いで衣川を見に行ったのです。そして衣川のほとりに佇ってますと、水際は凍って、もう実に寒くてやりきれなかった。それでこんな歌を残しています。

取り分きて心も凍（し）みて冴ぞ渡る
衣河見に来たる今日（けふ）しも

というんですね。特別に心も凍みて、冴えわたる気持ちであった。衣川を見にきた今日という今日は。とりわきて心も凍みてというところ、ここに西行の初めてのみちのく発見があるだろうと、私は思います。都と異なる厳しい自然も発見ですけれど、そこに築かれた堅固な城柵、そしてこのようにして治まり、治められている秀衡の、奥州藤原氏父子三代の血の通った政治、そしてそこに生きている北の人の表情、それが「取り分きて心も凍みて」という言葉になって表れているのではなかろうかと思うんですね。

もう一つ、これは今年いただいた本で、山形大学の名誉教授の後藤利雄氏が、『みちのくの西行』という本を出している。ここでいろいろ教えていただいたんですけれど、西行は第一回の平泉行きを本当に歌枕を探訪するためにしたんだろうか、後藤氏は、自分はそうじゃないと思う、という見解が書いてある。これは私は非常に面白かったので、ここで紹介したいと思うんですけども、西行

は、平泉に行ってみると、いろんな人に逢ったと書いてあるんです。私も前からこれは何だろと思っていたんですけれど、奈良の僧徒が、罪を犯して、陸奥にたくさん流されてきていたというんですね。これは奈良の興福寺の僧徒でして、興福寺で内部抗争があった。別当隆覚の排斥運動を企てて、失敗してしまって、堂塔を焼くなどの乱暴をしたために、これは保延五年（一一三九）のことなんですが、捕えられて康治元年（一一四二）に十五人が陸奥に流罪になったことが左大臣頼長の日記『台記』に見えます。このとき流罪になった僧徒が、どこにいたかということなんですが、やはり中尊寺にいたんですね、流人として置かれていた。十五人全員が中尊寺に留置されていたのではなかったろうけども、ともかく西行は平泉で、中尊寺に行ったら彼等に逢った。で、都の物語をすると、彼等悪僧たちはみんな涙を流した。そしてまた命があれば、都に召し返されることもあるだろう。その時はまたいろいろと物語をしましょうなどといって、

涙をば衣川にぞ流しける
ふるきみ（君）やこを（雁）思ひ出でつつ

と、慰めているわけなんです。（『西行法師家集』）

ところが後藤氏は、その中に実は一人、西行のゆかりの人、旧知みたいな人が一人いたんだと言うんですね。それは中尊寺じゃなくて、滝の山（南村山郡、蔵王山の西北）というところに流されていたらしくて、そこで特別な行を課せられてやってたらしいと。とても寒い所らしいですけれども、西行が、そのあと滝の山に行って歌を詠んでいる。ゆかりの人に逢って、それから滝の山の桜も詠んでいるけれども、こういうふうに出羽の国の滝の山というところに、一人は流されていた、そういう説を立てておられます。西行は都から隠れた役割を帯びて、奈良の僧徒がその後罪流の地で、どんな生活をしてるか、許してもいいような生活をしてるのか、まだ悪僧のまま改心していないか、それを見極める命を帯びていたのではないか、というようなことを推測されているのです。私にとっては、非常に耳新しい説で、面白く読みました。

それからもう一つ西行が、この平泉に行ってびっくりしたのは、束稲山の桜だったということですね。ご承知のように、西行は吉野に何度となく行って、桜の歌を沢山詠んでいますが、陸奥のような、異文化の天地に、全山を覆うほどに桜の花が咲くという場面を、想像していなかったんでしょう。けれど「陸奥国平泉に向かひて、たはしね（束稲）と申す山の侍るに、異木は少なき様に桜の限見えて、花の咲きたりけるを見て詠める」つまり、ほかの木はなくて、桜が一面に咲いてるのを見て詠んだという、詞書きです。そして

きゝもせずたはし（束稲）ね山の桜花
吉野の外にかゝるべしとは

これもいい歌ですね。きゝもせず、聞いたこともない、初句切れですから、新古今ばりです。下の句で西行の見解が出ているので、桜の美しいのは吉野、桜は吉野とばっかり自分は思っていたけれども、陸奥の桜が、豪快に山いっぱい桜色になって咲いているのを見たんです。現在も中尊寺に参りますと、北上川の対岸にこの束稲山が見えます。

『吾妻鏡』の中に、そういう陸奥の桜の記事がありまして、文治五年九月二十七日に頼朝は、自分が滅ぼした平泉に行ってるんですね、そして衣川を見たんです。衣が関というと、あたかも函谷関のようだった。左は高山に隣り、右は長途を顧み、開けていた。南北は同じく峰々が連なっていた。だから衣川は非常に堅固な要塞だったのです。中尊寺から、遠望することができますし、白山能舞台の裏側のあたりから、私はよく眺めましたけれど、今はもうほとんど衣川は見られません。かすかに遠くに光っているのが衣川だと説明されれば、気がつく程度です。そのころの衣川というのは、そうじゃなかったらしいですね。そしてその衣川が海陸を兼ねて、そして衣川沿いにもずっと桜が植わってたらしいんですね。その衣川は北上川に流れ込んで、北上川は大河になって石巻で太平洋に注ぐわけです。船便がよかったために、海の幸と山の幸と、それから物産と、そういうものをすべてここに集めることができた。その川のあいだに三十里余りにわたって、桜が植えられてい

たとあります。これは安倍貞任、宗任の父頼義が植えた桜らしいんですけども、最近、十年ほど前から束稲山にそういう桜を復元したいと植樹しているそうです。陸奥は昔に帰りたがっている。平泉は、昔の文化都市に帰りたがっているという感じがいたします。

かつて、平泉では西行も興奮しているけど、芭蕉も『奥の細道』の中で最も興奮してるのは、この平泉なんですね。

夏草や兵どもが夢の跡

という有名な句を残していますけれど、そのあたりが文章も急に音律が高くなってくるんです。「偖も、義臣すぐって此城にこもり、功名一時の叢となる」というんですね。「さても」と書き起こして、義臣すぐってこの城にこもり、その功名はたちまち叢になってしまった。「国破れて山河あり」と言って、芭蕉はしばし草をうち敷きて、泪を落としはべりぬと言ってるんですけれど、芭蕉がこの『奥の細道』の中で、こんなに長いこと泪を流して座ってたのはここだけです。

芭蕉は一体何に感動したのか。「国破れて山河あり」そういう歴史に感動したのかというと、そうでない。どうもこの芭蕉も西行と似ていて、その歴史の中の人間、生き方、人間がどのように生きて終わるものなのか、「偖も、義臣すぐってこの城にこもり」という、そういうような志ですね。陸奥の栄えを守ろうとした志、その志が弊えてしまった、そういう「歴史」を悲しんでいるのであって、単なる一般的な歴史ではないわけです。功名は一時の叢となり、国は破れて山河が残り、平泉三代の大きな大きな志というようなものも、泡に帰してしまった。自分の目の前にあるものは、単なるうち開けた田野にすぎないということなんですね。

私は、先日平泉に参りました折、なんと幸福なことにも、翌日は北上市に東北の芸能祭りというのがあったんです。この中尊寺のあたりにも、芸能がたくさん残っております。殊に毛越寺には「延年の舞」が伝承されているんですけれど――、北

上市では真っ暗な夜の道路を鬼剣舞の大軍団が流れる、それを見たんです。鬼剣舞の激しい踊りというのは、あれは念仏踊りだと言われている。念仏踊りにしては激しすぎる鬼の面と、抜刀をした舞と、立てた髪、「ケサイ（毛賽カ）」と言って、鳥の羽根を頭へ立てるんですけれど、それが死者の形なんだというんです。死者が鬼の面を被って、この世に現れて、激しい戦の有様を舞うんですね。それは前から気になっていたんですけれども、宮澤賢治という優れた詩人が、そのことをこんなふうに歌っているんです。

「Ｈｏ！　Ｈｏ！
　むかし達谷の悪路王
　まっくらくらの二里の洞
　わたるは夢と黒夜神
　首はきざまれ漬けられ
　アンドロメダもかぶりにゆすれ
　青い仮面コのこけおどし
　太刀を帯びてはいっぷかぶ
　夜風の底の蜘蛛おどり
　胃袋はいてぎったぎた」

というような非常に凄惨な『原体剣舞連』という歌なんですけれども、そういうのを残してる。これはもうまったく宮澤賢治の考えによると、悪路王を、歴史ではアテルイといっていますけれど、それこそ安倍氏や清原氏が台頭するよりももう一つ前の陸奥の悪路王が、非常に無残な敗北を大和朝廷から喫して、そして首はずたずたに刻まれ、塩漬けにされて都に送られたという。（それはさっき御遺体学術調査の記録映画で見た泰衡の首と、とても似ているわけですけれども）そんなふうに陸奥を攻める時の大和の残酷さというようなものに対する悲しみと哀悼と怒りと、そういったような単純でない情念が、あの鬼剣舞の中には籠もっているような気持ちがするわけなんです。

その悪路王だけじゃない、そのあとの安倍氏の貞任、宗任の時代から藤原四代泰衡まで、そういう運命を受け続けてきた陸奥というのがあって、そしてまたそれは、戦国の覇者伊達政宗の雄図を触発することにもなったでしょう

そして、明治の、戊辰（ぼしん）の戦いがあった。そういう内乱のようなものがあるたびに、陸奥というものが、ある過激な運命を背負いながら、何度でも立ち上がってきた。そういう時に死んだ死者たちの弔いというようなものをしなければ、生きていられない気分になってくる。それがその鬼剣舞というような形で、念仏踊りと言いながら、ああいう激しい鬼剣舞の踊りになって、今日に伝わっているんじゃないだろうか、ということを考えるわけなんですね。

最後に、中尊寺では、『秀衡』というお能を中尊寺の奥にあります白山神社能舞台でもって、一山の僧職の方たちが舞台を勤めているんです。この『秀衡』というお能は、私の師匠である喜多実師が、また私の歌の同門である土岐善麿氏（石川啄木の友人で、最後の石川啄木の骨を拾った人なんですけども）の作詞に節や型をつけて、お二人で作られたお能です。この『秀衡』という能は、非常に印象的なんです。というのは、義経は陸奥に、北陸安宅ノ関を越えて、日本海側を通って、平泉まで逃避行したわけですけれども、安宅ノ関の富樫氏というのは、白山を信仰してきた一族です。白山神社の信仰のある道すじを辿って、山伏・信者たちに守られて、漸く平泉入りができたのかもしれないと思うのですけれども、この義経が平泉で刺客にあう。弁慶に救われて、しみじみ述懐する。どうも秀衡が亡き後この平泉も危ない。何か鬱勃とした異変が起きそうな気配がすると、つまり、泰衡とか、さっきの和泉三郎忠衡とか、西城戸（錦戸）国衡とか、そういう人たちがお互いに暗黙のうちに自分が主導権を握って、秀衡のあとの平泉の王者になろうとしているようなところがあった。けれど秀衡が遺言したのはどういうことかというと、この秀衡も清衡と同じように、なかなか人物を見る目が高かった方だと思うのですけれども、義経を見た時、自分の息子よりも大将軍の器量がある。だから自分のあと、この陸奥を京都に対応できる立派な国にしていくために、義経を大将軍として推戴して、平泉を守りなさいという遺言をした。けれども、どうもそのあと、それがうまくいかなかった。和泉三郎忠衡は、義経をよく守ったけれども、どうも泰衡が、頼朝の甘言に踊らされて、義経の命を狙っていることがわかった。実際には、その泰衡によって、義経が殺され、その泰衡は頼朝に、「お前は自分の主殺しをしたから、信用ができない男だ」と言って責められて、それで一挙に頼朝によって、平泉は滅亡、消えてしまうわけです。けれど能『秀衡』の中では、そうなってないんです。

やっぱり平泉にとっての夢というのは、秀衡であり、判官義経であり、毛越寺を建てた二代基衡、それから中尊寺を建立した初代清衡、こういう方々が見えない力で、平泉を護っているという、そういうことが望ましいわけです。それで義経は、金色堂に入って、心静かに秀衡公の霊前に表白文、自分の真心からなる訴えを読み上げる。そうすると金色堂の須弥壇の下にある秀衡の金棺が揺らいで、秀衡の亡霊が立ち現れる。ミイラになっているわけですけれど、それが立ち現れて、あれほど自分が遺言をしたのに、息子三人は力を合わせてこの平泉を護ろうとしない。義経ほどの器量人を大将軍に仰ぐことをやめてしまったようだ。けれどまだ私の魂が滅びない限り、東北は滅びません。平泉三代の魂、志が守護しているから、我れ先導をなさん、と言って北方に義経を導く。いかにも平泉らしい夢だと思うんです。

より北方に道を開く前に、昭和というありがたい文化の時代に、この金色堂は修復されましたし、一字金輪仏〝人肌の大日〟といわれる秘仏も健在です。数々の優れた仏像が工芸が、平泉には護り伝えられているわけです。金色堂に入って、夢というもの、人間が能うる限りの夢を持って、一つの浄土という文化圏、平穏なあらゆる人間が許される浄土の夢を達成しようとした、そんなことを偲んでいただきたいと思います。

〔平成九年十月十六日、有楽町・朝日ホールにおける、馬場あき子先生の講演を小誌編集子が成稿にした。〕

金色堂國寶指定百年祭日誌抄

平成八年

◇十月

二十一日　局議「金色堂國寶指定百年」記念事業について

二十六日　一山協議会「金色堂國寶指定百年」記念事業について

◇十二月

三　日　地元報道各社記者発表「金色堂國寶指定百年記念祭」

九　日　百年祭催行挨拶（盛岡・仙台方面、執事長）

十一日　百年祭催行挨拶（東京方面、執事長）

二十一日　金字法華経納経依頼（東京都植村和堂氏、管財澄元）

二十二日　百年祭企画会議

二十七日　百年祭企画会議

NHKテレビ「中尊寺の正月準備と百年祭」放送（東北各県）

平成九年

◇一月

一　日　初詣参拝者にリーフレットにて百年祭を紹介。

岩手日日新聞にて百年祭を紹介。

八　日　恒例「金盃披き」にて百年祭の内容を発表。

十三日　百年祭企画会議

信濃毎日新聞「美の探検・新たな世界へ」にて百年祭を紹介。

十八日　百年祭催行挨拶（朝日新聞東京本社・植村和堂氏、執事長ほか）

二十日　百年祭企画会議

二十九日　百年祭催行挨拶（平泉町関係、執事長）

三十一日　百年祭記念文化講演会打ち合わせ（朝日新聞秋田支局、総務春興）

◇二月

一　日　新聞広告等で百年祭の紹介を始める。

十二日　百年祭記念文化講演会講師挨拶（高橋富雄氏、仏文研邦世・総務春興）

二十一日　百年祭関係協賛協力一関地方振興局長陳情（町観光協会長、観光課長、総務春興）

二十五日　百年祭紹介印刷物製作（ポスター、リーフレット、シール等）

全国の旅行代理店宛百年祭紹介印刷物を送付。（四二〇〇店）

岩手県内外の観光機関や県の出先機関に同内容を送付。（七〇件）

二十七日　百年祭記念文化講演会打ち合わせ（朝日新聞一関通信局、総務春興）

本堂山門に「百年祭」催行を奉掲。

二十八日　座談会「金色堂國寶指定百年」（東京、鈴木嘉吉氏・杉本苑子氏・大矢邦宣氏・中尊寺貫首）

◇三月

一　日　百年祭紹介リーフレット参拝者に配布並びに郵送物に同封。

二　日　百年祭企画会議

四　日　百年祭企画会議

百年祭ポスター二種類製作（金色堂内陣・一字金輪仏）

宗内寺院、観光機関、旅行代理店等に送付始まる。

◇四月

五　日　百年祭表示看板作成（中尊寺坂下広告塔）

八　日　旅行代理店百年祭催行挨拶（北陸方面、～十一日、総務快俊）

九　日　旅行代理店百年祭催行挨拶（東京方面、町観光協会長、観光課長、執事長）

十一日　平泉観光協会「春の藤原まつり」ポスターにて百年祭紹介。

十三日　旅行代理店百年祭催行挨拶（大阪・名古屋・福岡方面、～十七日、参拝事業部慎宥）

十八日　雑誌・ミマンにて百年祭紹介。

二十二日　旅行代理店百年祭催行挨拶（福島・山形方面、～二十四日、総務広元）

文化講演会一関会場第一回準備会（朝日新聞一関通信局・平泉文化会議所・一関「文学の蔵」設立委員会・仏文研邦世・総務春興）

二十四日　岩手県「黄金王国」キャンペーンにて百年祭紹介。（於東京駅構内、参拝事業部澄照・門前会二名出向）

◇五月

一　日　インターネット開設、百年祭紹介。

十　日　岩手放送「よみがえる平安の栄華」放送

二十日　岩手県東京サービスセンター・七月行事発表で百年祭を紹介。（二十日新聞関係、二十一日テレビ・ラジオ関係　以上参拝事業部慎宥、二十七日雑誌関係・平泉観光協会長）

二十一日　旅行代理店百年祭催行挨拶（仙台方面、総務春興）

二十七日　記念誌編集委員会

百年祭記念文化講演会一関会場案内状発送

◇六月

一　日　日本道路公団東北道サービスエリア、料金所にポスター掲出。

日本航空機内誌「ウインズ」

にて百年祭を紹介。
観光連盟季刊誌「岩手王国」にて百年祭を紹介。（執事長寄稿）

二日　文化講演会東京会場打ち合わせ（朝日新聞本社、仏文研邦世、総務春興）
企画展「光堂物語」出陳資料写真撮影（東京、管財澄元）

三日　岩手県「黄金王国」首都圏主要駅キャラバンにて百年祭を紹介。（参拝事業部澄照）

五日　植村和堂氏金字法華経写経風景撮影（東京、管財澄元）

六日　開闢法要の案内状発送

七日　「法話と映像」ツアー募集打ち合わせ（八幡平ホテル、近畿日本ツーリズム・総務春興）
岩手日日新聞「LIVING」にて百年祭を紹介。（執事長インタビュー）

八日　百年祭職員研修会（貫首法話）

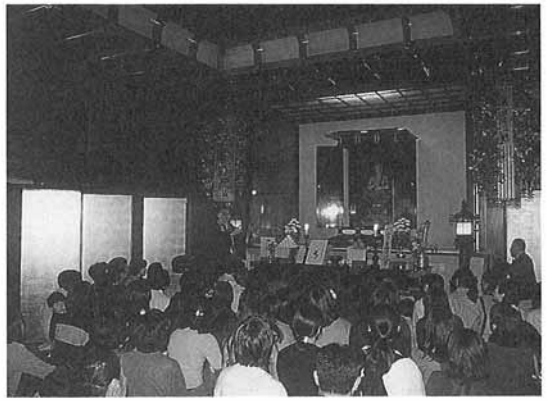
十二日　文化講演会一関会場　第二回準備会
秘仏遷座指導の為文化庁根立研介調査官来山。

二十三日　JR東京駅、新宿駅、池袋駅にポスター掲出。

二十四日　企画展「光堂物語」出陳資料借用（東京国立博物館、管財澄元）
NHKテレビ盛岡放送局「ごっくん岩手」にて百年祭を紹介。（執事長インタビュー）

二十六日　JR全国主要駅にポスター掲出。（一二七五駅）
東北六県、新潟県で百年祭CM放送始まる。

二十八日　秘仏遷座並びに入魂法要マスコミ関係統一取材（朝日新聞、岩手日日新聞、岩手日報、河北新報、共同通信社、産経新聞、スポーツニッポン新聞、毎日新聞、読売新聞、一関有線テレビ、岩手朝日テレビ、岩手放送、岩手めんこいテレビ、NHK盛岡放送局、テレビ岩手、週刊新潮、フラッシュ、るるぶ、歴史と旅の方々）
産経新聞夕刊、日本経済新聞夕刊等で百年祭を紹介。



◇七月

一日　金色堂國寶指定百年記念祭開闢
七時五〇分　秘仏開扉法要
十時三〇分　開闢法要（式衆、稚児ほか練行にて金色堂へ）
十一時二〇分　金色堂法楽
十二時三〇分　祝賀会（来賓ほか百六〇名出席）
秘仏一字金輪仏頂尊御開帳
企画展「光堂物語」開幕（於資料館、東京国立博物館所蔵・明治三十年金色堂模写図等）

二日　いわい文化振興セミナー「東北の文化と観光を語る」（於ベリーノホテル一関　金色堂國寶指定百年を記念して貫首講話、一山五名出席）

五日　金色堂國寶指定百年記念文化講演会「みちのく―文学とこころ」（於岩手県一関市、一関文化センター、八〇〇名。一山八名）
大岡信氏（詩人、「いのちの言葉　ことばの命」）
上野洋三氏（大阪女子大学教授、『奥の細道』芭蕉直筆本を読む」）
千田孝信（中尊寺貫首、「心が光る（ひかる）　光堂」）
フジテレビ「めざましテレビ」にて全国中継。
スポーツニッポンにて百年祭を紹介。

八日　産経新聞夕刊「歴史ドラマランド」にて百年祭を紹介。

九日　日本テレビ「ズームイン朝」にて全国中継。（執事長インタビュー）

十一日　百年祭記念文化講演会打ち合わせ（朝日新聞秋田支局、総務春興・広元）
百年祭記念誌写真撮影（天台寺ほか、管財澄元）
産経新聞夕刊「歴史ランド」にて百年祭を紹介。
日本道路公団東北道サービスエリア、料金所にポスター掲出。

十三日　法華経一日頓写経会、八五〇年ぶりに厳修（於本堂、一山総出仕、県内外より一五〇名参加）

十四日　NHK盛岡放送局「国宝百年中尊寺の美術」放映（八月十五日まで五十回、八月十八日より再放送）

十七日　如法写経十種供養会（於本堂）

金色堂納経（一日頓写法華経、般若心経）

二十二日　写経会十種供養法具返却（延暦寺、法務仁秀）

二十四日　リビング（一二地域のリビング）にて百年祭を紹介。

二十五日　百年祭記念文化講演会打ち合わせ（有楽町マリオン　天台声明音律研究会、執事長ほか）

◇八月

一　日　雑誌・旅の手帖「奥州藤原氏の栄華を訪ねる」で百年祭を紹介。

六　日　テレビ東京「いい旅夢気分」にて百年祭を紹介。

八　日　百年祭記念文化講演秋田会場案内状発送

十　日　雑誌・旅「中尊寺秘仏一字金輪佛頂尊が御開帳」で百年祭紹介。

十二日　岩手日報「悠久の光堂」五回連載

二十日　日本テレビ「おもいっきりテレビ」（今日は何の日で金色堂建立の日として）百年祭を紹介。

二十四日　雑誌・歴史と旅「中尊寺・金色堂国宝指定百周年記念祭」で百年祭を紹介。

二十六日　企画展「浄土讃仰」出陳資料借用（天台寺、大泉寺、管財澄元）

◇九月

一　日　企画展出陳資料返却（東京、管財澄元）

「光堂物語」閉幕

記念誌『金色堂』発刊

六　日　企画展「浄土讃仰」開幕（於資料館　阿弥陀来仰図、二十五菩薩ほか）

七　日　百年記念祭郷土芸能奉演始まる。（於境内・九、十月の日曜日と祭日催行。一五団体）

十一日　旅行代理店百年祭催行挨拶（大阪、参拝事業部慎宥）

JR全国主要駅にポスター掲出（九八五駅）

十四日　金色堂國寶指定百年記念文化講演会「みちのく―文学とこころ」（於秋田市、秋田市文化会館、三二〇名。一山五名）

高橋富雄氏（盛岡大学長、「秋田の平泉」）

仙道作三氏（オペラ作曲家、「二十一世紀は心の時代」芸術文化が果たす役割は）

千田孝信（中尊寺貫首、「心が光る　光堂」）

読売新聞「黄金花咲く」十回連載

十八日　雑誌・ほんとうの時代「みちのくのスケッチ紀行」で百年祭を紹介。

二十一日　TBSテレビ「ワンバイワン」放映（対談、高島忠夫×古今亭志ん朝）

三十日　岩手県、宮城県、福島県に百年祭CM放送。

◇十月

七　日　百年祭記念文化講演会打ち合わせ（有楽町マリオン　総務春興）

十六日　金色堂國寶指定百年記念文化講演会「みちのく―文学とこころ」（於東京都中央区、有楽町マリオン朝日ホール、六〇〇名。一山六名・町教育長・観光協会長・ふるさと平泉会・日光観音寺檀信徒様ほか）

天台声明（天台声明音律研究会）

映画「藤原三代御遺体調査記録」（中尊寺）

馬場あき子氏（歌人、「歌人のみちのく」）

千田孝信（中尊寺貫首、「心が光る　光堂」）

河北新報「黄金の奇跡」十回連載

十八日　雑誌・ミマン「岩手の旅・平泉黄金文化と鬼すむ高嶺」で百年祭を紹介。

二十一日　岩手日報カルチャースクール一行来山、本堂にて法話と写経。（二〇名、執事長ほか）

二十五日　いわき市内郷青年会議所一行来山、本堂にて法話と写経。（一四名、貫首ほか）

二十六日　百年記念郷土芸能奉演会（於能楽堂・境内）

二十八日　金字法華経納経受領出向（東京都植村和堂師、管財澄元）

◇十一月

五　日　金字法華経奉納十種供養法要習礼

記念誌編集委員会

六　日　金字法華経納経漆塗筥受領

九　日　金字法華経記者取材

十　日　藤原四代公追善紺紙金字法華経奉納十種供養会（金色堂國寶指定百年記念祭結願）

十時　十種供養会

十一時三〇分　写経奉納（練行にて金色堂、式衆・詠歌衆・金字法華経納経植村和堂師一行五〇名・来賓ほか練行）

十一時四五分　金色堂納経

十二時三〇分　清宴

十一日　秘仏抜魂法要

金色堂國寶指定百年記念祭 実行委員会

委員長――菅原光中（執事長）

企画委員会――佐々木秀円（参務）、菅野澄順（参務）、三浦高信（参務）、佐々木邦世（仏文研）、菅野成寛（仏文研）、三浦春興（執事）、佐々木仁秀（執事）、破石澄元（執事）、佐々木慎宥（執事）

記念誌編集委員会――菅野澄順（参務）、佐々木邦世（仏文研）、菅野成寛（仏文研）、破石澄元（執事）、佐々木慎宥（執事）

実行内容担当区分

総務部――企画委員会・記念誌編集委員会事務局／映像と法話／記念文化講演会

法務部――法要関係／秘仏御開帳／写経会／般若心経一万巻納経

管財部――企画展／秘仏室等仮設工事

参拝事業部――郷土芸能奉演／広報宣伝

金色堂國寶指定百年記念祭 紹介印刷物

◎ポスター（金色堂内陣、一字金輪仏）　四、四〇〇枚
◎リーフレット（二種）　二六〇、〇〇〇枚
◎シール　一〇〇、〇〇〇枚

［文化講演会］

◎ポスター（三種）　七〇〇枚
◎リーフレット　一二、五〇〇枚

［郷土芸能奉演］

◎リーフレット・プログラム　四、五〇〇枚

金色堂國寶指定百年記念祭をご紹介いただいたマスコミ各社（敬称略）

◎新聞社・通信社

朝日新聞
岩手日日新聞
岩手日報
河北新報
共同通信社
神戸新聞
産経新聞
スポーツニッポン
中外日報
東京新聞
東京スポーツ
苫小牧民報
富山新聞
日本経済新聞
文化時報社
北羽新報
北陸中日新聞
毎日新聞
読売新聞
リビング

◎雑誌・週刊誌

アルカス（日本エアーシステム）
ウインズ（日本航空）
銀花（文化出版局）
Grazia（講談社）
週刊現代（講談社）
週刊新潮（新潮社）
女性自身（光文社）
旅（日本交通公社事業局）
旅の手帖（弘済出版社）
VACATION（クリエイティブ・タンク）
ほんとうの時代（PHP研究所）
ミセス（文化出版局）
ミマン（文化出版局）
歴史と旅（秋田書店）
るるぶ（るるぶ社）

◎テレビ

青森朝日放送
秋田朝日放送
秋田テレビ
一関有線テレビ
岩手朝日テレビ
IBC岩手放送
岩手めんこいテレビ
NHK
仙台放送
テレビ岩手
新潟総合テレビ
日本テレビ
東日本放送
福島テレビ
フジテレビ
山形さくらんぼテレビ

紹介メディア

「しんきんVISAはれ予報」、NTTいわて社内報、すくらんぶる、NTTテレカ社内報、KSD「沙羅双樹」、観光連盟「岩手路イベントスケジュール秋号」

金色堂國寶指定百年記念祭

□郷土芸能奉演

月日	場所	郷土芸能名	団体名	(肩書)代表者	住所
九月　七日	金色堂前 本堂前	行山流長部鹿踊	行山流長部鹿踊伝承会	(代表)高橋　久治	平泉町
九月　七日	金色堂前	金龍太鼓	金龍太鼓	(代表)岩渕　金雄	平泉町
九月　十四日	本堂前 金色堂前	赤伏神楽	赤伏神楽保存会	(代表)千葉　幹男	平泉町
九月　十五日	本堂前 金色堂前	大平神楽	大平神楽保存会	(代表)小野寺六呂	平泉町
九月二十一日	本堂前 金色堂前	長部神楽	長部神楽保存会	(代表)千葉　寿	平泉町
九月二十三日	金色堂前 本堂前	川西大念佛剣舞	川西大念佛剣舞保存会	(庭元)佐藤　圓七	胆沢郡衣川村
九月二十三日	本堂前 金色堂前	田頭讃念仏(胴念仏)	田頭讃念仏保存会	(代表)浅利　和昭	平泉町
九月二十八日	本堂前 金色堂前	柳田念佛剣舞	柳田念佛剣舞保存会	(庭元)千葉　専治	胆沢郡胆沢町
十月　五日	本堂前 金色堂前	達谷窟毘沙門神楽 (子供神楽)	達谷窟毘沙門神楽保存会 (子供神楽)	(代表)照井　幸男	平泉町
十月　十日	本堂前 金色堂前	江刺市梁川 金津流獅子躍	江刺市梁川 金津流獅子躍保存会	(庭元)平野　幸男	江刺市
十月　十二日	本堂前 金色堂前	行山流都鳥鹿踊	都鳥鹿踊保存会	(代表)千田　長	胆沢郡胆沢町
十月　十九日	本堂前 金色堂前	奥山行山流清衡鹿踊	奥山行山流清衡鹿踊	(会長)中島　清登	江刺市

□郷土芸能大会(十月二十六日)

月日	場所	郷土芸能名	団体名	(肩書)代表者	住所
十月二十六日	本堂前	川西大念佛剣舞	川西大念佛剣舞保存会	(庭元)佐藤　圓七	胆沢郡衣川村
十月二十六日	能楽堂	中尊寺白山神社獅子舞	衣関芸能保存会	(代表)千葉　正佳	平泉町
十月二十六日	能楽堂	中野神楽 (南部神楽・山谷系)	中野神楽	(五代目)斉藤　昭一	栗原郡栗駒町
十月二十六日	能楽堂	大償斉部流野口伝 鴨沢神楽	鴨沢神楽保存会	(会長)後藤　興一	江刺市

金色堂國寶指定百年記念特別寄付

平泉町　㈱平泉観光レストセンター様　写経机五〇脚
〃　㈲平泉観光写真社様　写経机五〇脚
一関市　㈱精茶百年本舗様　納経漆塗経筥
東京都　小西晫也様　納経漆塗経筥荘厳
平泉町　鈴木正人様　金字法華経十巻軸端

般若心経奉納経　三千二百六十一巻

「法話と映像」参加状況　八〇団体　二、九六七名

金色堂國寶指定百年祭　法要表白文

一字金輪仏頂尊　開扉法要

平成九年六月二十八日

謹み敬って　本尊界会　一字金輪仏頂尊宝前に白して言さく

方に今
金色堂国宝指定百年を記念し　厳かに　瑜伽三密の壇場を飾り　恭しく　秘密曼荼の扉を開き奉る

伏して惟るに
本尊界会は　八百七十年の古　鎮守府将軍　陸奥守秀衡公朝夕念持の秘仏なり　諸仏の仏徳は　悉くこの一身に鐘まり　金輪最勝の功徳は総じて一字の真言に秘めらる　五智の宝冠は　遍く法界の群生を照し　智拳の密印は　厳かに法界の有情を加持し給う

仰ぎ願わくは　本尊界会
諸大補処　舎利弗目連等の　諸声聞衆　総じては　尽空法界　一切三宝に言して白く

方に今
大日本国　陸奥国関山中尊寺　今この道場に於て　金色堂国宝指定百年を記念して　恭しく　報恩謝徳の法筵を開き厳かに　法華読誦の妙行を修することあり

その旨趣　如何となれば夫れ
稽古讃仰の窓の前には　醍醐一乗の花　鮮やかに開き
如説修行の床の上には　六根懺摩の月　朗らかに照す

誠に是れ
一句も聞法すれば　末世の衆生も　阿耨菩提の極味に潤い
一法も随喜すれば　濁悪の闡提も　本来真如の蓮蕊を開く

伏して惟るに
藤原清衡公は　曩昔奥羽の宏域を鎮撫し　想を遠く末代の福祉に致す　慈覚大師の霊跡を増営しては　諸仏摩頂の場を開き　金色堂を建立しては　往生極楽の行儀を証す　金書銀字光を交えては　官軍夷虜を隔てず　鐘声の地を揺るがしては　毛羽鱗介　遍く浄利引導の大願を発す　志願誠に　崇高なり
本有の霊験　灼かにして　参詣の諸人は　忽ちに百千の厄難を払い
胎蔵の大悲　顕かにして　渇仰の衆生は　速やかに善願を成就せしめ給わんことを　乃至法界　利益周遍　丁

金色堂國寶指定百年祭開闢法要

平成九年七月一日

抑も　報恩謝徳の場　法華読誦の砌　法味を餐受し　功徳を証明せんが為に　上天下界の神祇冥道　定んで来臨影向し給うらん　然れば則ち　梵天帝釈　四大天王　総じては扶桑国中　三千余座の　大小の神祇　別しては　円宗擁護日吉大権　赤山明神　当山鎮守白山妙理大権現等　各々法楽荘厳　威光増益の為に　一切神分に

般若心経　丁
大般若経名　丁

謹み敬って　常寂光土　第一義諦　久遠実成　大牟尼尊
西方願王　弥陀種覚　超八醍醐　一乗妙典　普賢文殊等

爾しより以来
八百七十有余年　法灯を当代の末弟に伝えし　道俗の先徳先人　艱難辛苦また深重なり

是を以て
今　慇懃に　讃仰の誠を捧げて　金色堂開創の願主藤原清衡公を始め奉り　藤原歴代諸公　宏大の偉業と　爾来幾春秋　累代の真俗一貫　営々護持の徳行を讃仰し奉る

観れば夫れ
一乗妙典読誦の梵音は　凛々として　以て満堂　実相内証の遺徳を増暉し　所唱十方賢聖の宝号は　朗々として　以て満山　常寂光土の荘厳を現前す

仰ぎ願わくは
仏日増輝　法輪常転
今上陛下　宝祚無窮
風雨順時　万民豊楽
山門紹隆　法灯不滅
金色堂宇　金剛不壊
祭典行事　円満成就
結縁諸人　各願成弁

金色堂國寶指定百年祭結願十種供養会

平成九年十一月十日

先入　堂

次唄

次散　華

次対　揚

次錫　杖

次神　分

結願成就の庭　如法写経の砌なれば　天衆地類定んで来臨影向し給うらん　然れば則ち　梵天帝釈　四大天王を始め奉り　日本国中　三千余座　大小神祇　殊には　円宗擁護　山王三七　部類眷属　当山鎮守等各々　威権自在にして　仏事を顯揚せんが為に　一切神分に

般若心経　丁

大般若経名　丁

次事　由

謹み敬って　霊山浄土　久遠実成　釈迦牟尼如来　証明法華　多宝世尊　別しては　安養世界　弥陀種覚当来導師　弥勒慈尊　平等大会　直至道場　一乗妙法蓮華経　八万十二　権実聖教　普賢文殊　観音勢至等の諸大菩薩　身子目蓮　迦葉阿難等　諸大声聞　総じては妙法蓮華経中一切の三宝の境界に　白して言さく

方に今

南閻浮州　大日本国　陸奥の国　東北大本山　関山中尊寺　今　此の道場に於て　金色堂国宝指定百年法会の盛儀　結願円成　報徳謝恩の為に　恭しく　普賢の道場を飾り　六根の罪障を懺悔し　如法の修法を企て紺紙金字妙法蓮華経十巻を書写し奉り　十種供養の精誠を致すことあり

その旨趣如何となれば夫れ

乃至法界　平等利潤

敬白　辞拙く　報恩　旨深し　三宝諸天　悉知洞鑑し

給え　丁

此の妙法蓮華経は　一部八軸の真文　軸々に金玉の声あり　二十八品の妙理　品々優曇の花に似たり　初め如是我聞より　終り作礼而去に至るまで　諸佛出世の本懐　唯此の経に現る　四花　空より雨ふりて方便の門を開き　千界地より湧きて久遠の本を顕す　釈名文の判釈　正宗流通の分の大概を略せども　佛知見開示悟入の方法　悉く此の経に鐘れり

是を以て

慈覚大師は　深く首楞厳院の洞に入って　十如権実の妙文を書し給う　如法経の紙を謂えば　無生懺悔の白麻　水を尋ぬれば楞厳禅定の甘露　墨は是れ　鷲峰山の岸の石　筆は即ち王舎城の春の草　爰に今　一山の浄侶　並びに有縁の有志　楞厳の古風を慕いて　如法書写の聖行を修し　厳かに十種供養の精誠を尽し奉る

然れば則ち

この浄行の功徳を廻らすところ　当山大檀越　藤原清衡公を始め奉り　歴代諸衡公尊儀　並びに有縁無縁一切三界の万霊　悉く阿耨多羅三藐三菩提を成し　一結の経衆　参詣の大衆　所願を悉く　円満成就せしめ給わんことを

謹んで発願す　丁

次発　願

至心発願　如法如説　書写一乗　十種供養　功徳威力

天衆地類　倍増法楽　仏日増輝　法輪常転　天皇陛下

宝祚無窮　天下泰平　万民豊楽　寺門紹隆　法灯不滅

金色堂宇　金剛不壊　結縁大衆　各願成弁　乃至法界

平等利益

衆生無辺誓願度　煩悩無辺誓願断

法門無量誓願学　無上菩提誓願証

影向神祇増威光　護持大衆成大願

次十種供養（略）

次宝　号

おんあみりたていぜいからうん

南無大乗妙法蓮華経

南無慈覚大師大雄金剛

南無自在房蓮光大和尚

次　総回向

願以此功徳　普及於一切

我等与衆生　皆共成仏道

南無　自他法界平等利益　丁

次　退　堂

一字金輪仏頂尊　抜魂法要

平成九年十一月十一日

先　三礼如来唄

次　表　白

謹み敬って　本尊界会　一字金輪仏頂尊　御尊像に白して言さく　金色堂国宝指定百年を記念して　厳かに青連慈悲の五眼を開き奉りてより百三十余日　本有の霊験　灼たかにして　参詣の諸人は　遍く最勝の功徳を受け　金剛の大悲　顕らかにして　渇仰の衆生は弘く善願の成就を祈り奉る　三身万徳の妙用　利益衆生の巨益　莫大なりき

方に今　記念の式典を円成し　恭しく秘密蔓荼の扉を閉じ　暫く法性の空位に送り奉り　重ねて勧請し奉らんと欲す

唯願わくは　本尊　空寂の本位に還着し給え

次　華座　八葉印　明誦三反

想え　本性の法位の華座を設くと

おん　あ　そわか

次　弾指　挙面を上に向けて弾指　明誦三反

おんばさら　もきしゃもく

次　経　段

次　後　唄

次　真　言　南無　一字金輪仏頂

新讃衡蔵の建設

菅原光中

中尊寺はかねてからの念願であった新讃衡蔵の建設に着手しました。

時恰も、明治三十年に制定された古社寺保存法によって、中尊寺金色堂が特別保護建造物、即ち国宝の指定を受けて百年を迎え、先人の文化遺産護持に思いを致し、記念行事催行の中での起工であり深い因縁を覚えます。

現在の讃衡蔵は、昭和二十八年に着工し三十年三月三十一日に竣工した第一収蔵庫（平屋建、高床式）と第二収蔵庫（二階建、地階付）、及び昭和五十年に一棟増築した収蔵庫から成ります。

当初の建設については、昭和二十四年、法隆寺金堂壁画の焼失もあり、文化財保護の機運が俄かに高まりつつある中で制定された文化財保護法（昭和二十六年）による戦後全国で初の国庫補助事業でした。中尊寺においては、国宝「華鬘」の盗難事件（同二十八年）などもあり、宝物の管理保存、防火防災施設は緊急の事項として鉄筋コンクリート造収蔵庫の建設実現に努めておりました。

建設工事に当たっては、中尊寺収蔵庫建設委員会を組織し、岩手県教育長山中吾郎氏を委員長に委員十名、学界、文部省より顧問を委嘱して進められています。

この収蔵庫「讃衡蔵」の建設によって、山内の三千点にも及ぶ指定文化財を収蔵保管できたわけですが、同時に藤原氏四代の御遺体調査（昭和二十五年）の際の棺内副葬品や貴重な歴史的資料の保存管理と公開展示を行う施設として、東北地方のモデルとなったのです。文化庁をはじめ関係の諸機関や識者のご指導を得て、藤原氏の遺産の護持に余念無く今日に至りましたが、早いもので讃衡蔵も建設以来四十年の歳月を経ました。

この間、幸いに金色堂の修理や保存施設の改修をはじめ、紺紙金字一切経の修理、諸尊仏や国宝重文等、国庫の補助を得て着実に行ってまいりました。当讃衡蔵についても、収蔵品の保存に万全を期すると共に、出来るだけ多くの人々に藤原氏の偉業を認識いただくため、収蔵室の改装補修や展示室の改良にも努めてきた次第です。

しかし乍ら、讃衡蔵も年を経る毎に構造物自体、つまり矩体に痛労が確認され、収蔵文化財への影響も懸念され、耐用の限界に近づいてまいりました。これは無理からぬことで、既にその収蔵庫としての役割は十分果たし、次の施設に引き継ぐ時期に到っているわけであります。私共一山は、当時の関係各位の御努力に深く感謝を捧げつつ、今後の文化財保存対策に向かって新たな対応の必要が生じた訳であります。また、指定文化財の件数も増加しており、まさに二十世紀を終える今、新讃衡蔵を完備して、藤原氏の遺宝を後世に確かに伝えることが、中尊寺としての使命であり、藤原四衡公への報恩の事業と自覚しております。

新讃衡蔵建設の基本計画は、平成五年より開始しました。既存の讃衡蔵から得た四十年間の管理方法を下敷きとして、一山共通の願望意向も確認し、余処の保存施設を視察し、さらには文化庁をはじめ専門の知識を有する諸先生のご指導を仰ぎながら山内で自主的に検討委員会を構成し、三十数回の協議の中から基本構想を纏め上げた次第です。その上に出来上がった基本設計の概要を紹介しますと、一階が収蔵庫で二階が展示公開室の一棟建で防火防災、耐震構造の建築、そして外観は特別史跡という立地景観を害さない、そのことに特に留意しながら検討を重ねてまいりました。収蔵庫は文化財の素材性質に適するように、収蔵室を個別に設け、金工、木工、絵画、布、漆といった分類に応じて、それぞれ適切な条件が得られるように考慮されております。その上で、全室共、機械によるコントロールは極力控え、構造的に自然換気を適切に取り入れる工夫もされております。また活用・研究に資するよう、資料図書室、研究学芸室、修理室も設計されております。

次に展示公開室は、参道に続く前庭より段差無しで入館していただき、この階一つフロアで全て拝観出来るように設計しました。老若男女、身体の不自由な人も安心して見ていただけることが長年の願いだったからです。

室内正面には重文の丈六仏三坐像（阿弥陀如来、薬師如来二体）を安置し、ご来山の皆様に参拝をいただいた後、諸仏像、美術工芸、絵画経典類を巡観して、終わりに視聴覚室へと案内し、愈々藤原四公侯の眠る金色堂参拝へのプロローグとなればと思います。

さて、このような施設を境内のどの場所に建設出来るのか、私共は境内隈なく踏査し、その状況を話し合う、といった繰り返しの結果、やはり先人も選んだ現讃衡蔵の建つ金色院境内をおいて他に適地はなく、この地を建設地と定め、文化庁に許可の申請を行い、史跡地としての発掘調査も滞りなく進捗しておるところであります。

考えますに、金色堂、経蔵を遺し、惜しくも建武年間に焼失せる堂塔、諸仏諸菩薩、更には散逸した遺宝の数々に思いを致しつつ、先人が現在まで護持して来た三千点に及ぶ文化遺産は、境内の中心において大事に守っていくことこそ、藤原諸公の意に添うことと思うのです。

そもそも金色院とは、金色堂の別当として、堂内諸仏諸菩薩、藤原氏御尊骸を守りぬく使命を帯びた清僧の住する院であります。創建以来、院の変遷は歴史にその事跡を残していますが中世より近世、現代に至るまで、建物の移動、改築も捗りであることが、今次の発掘調査によって知ることが出来ました。やはり、最も利用価値のある区域であったのかも知れません。

新讃衡蔵は平成十二年春、完成の予定をしています。重ねていうならば、金色堂、経蔵をはじめ、山内諸堂に護持されて来た遺宝を、金色堂と一体のものとして保存する施設、さらには、諸尊像を安置し、正月より歳末まで古来の修法を行うと共に参拝の皆様が祈願を篭める仏堂として建立するものであります。

中尊寺全山の東西南北各谷々の中心に位置する金色院を、この際復元整備し、やがては既存の讃衡蔵も姿を消した時、大池を臨むこの聖地はまた新たな寺観を呈することとなるはずです。

藤原四衡公の善勝業を讃え、このわが国の至宝を後世に誤りなく伝える文化財保存の使命に、仏天のご加護と、遠近の皆様の深い御理解をお願い申し上げる次第です。

ネパール・チャリコットでの体験

青年海外協力隊
平成七年度第一次隊員
菅原恵子

任地の環境と農業

標高八千メートル級の山々、そして世界の屋根エベレストがそびえる国ネパール。そのヒマラヤ山脈には神々が宿るとされる美しくも神聖なる場所。人々はその真っ白な巨峰を眺め、神の姿を感じ、安らぎと自然の素晴らしさを思う。

私の赴任したドラカ郡チャリコットもそんなヒマラヤ山脈を百八十度見渡せる標高二千メートルの山岳地であった。

ヒマラヤが最も美しいのは、十一月〜二月の乾季の頃で、何度となく雄大な姿に励まされた。しかし雨季になると山脈は白い雲に覆われて姿を消してしまう。毎日降り続く雨のため、ネパール全土では土壌が流失したり、ことにもふもとの山岳地では山崩れや洪水が頻発する。自給自足で暮らす貧しい農村の畑は長雨後、一瞬にして流されてしまうといった、環境や地形の厳しさからくる災害も後を絶たず、バザールの活気も減る。トレッキング大国として世界的に有名になったネパールだが、その麓に住む山岳地の人々の生活は厳しい。それでも人々は神に祈り、畑を耕やし収穫を待つ。

チャリコットは標高五百メートル〜二千六百メートルに及び、熱帯果樹から落葉果樹まで実る。私の任務はその中でも常緑果樹（柑橘類）で、ネパール政府の郡農業開発事務所普及員として現地人スタッフと共に、ドラカ郡全域に換金作物としての果樹栽培を普及することが目的だったが、そこに至るまでには、まだまだ課題が多かった。

村には果樹園といわれるような集約的栽培を行っている農家は少なく、苗木などは殆どが実生であり、剪定ばさみ、のこぎりといった農具さえもなく、管理作業なしの放置栽培をしていた。

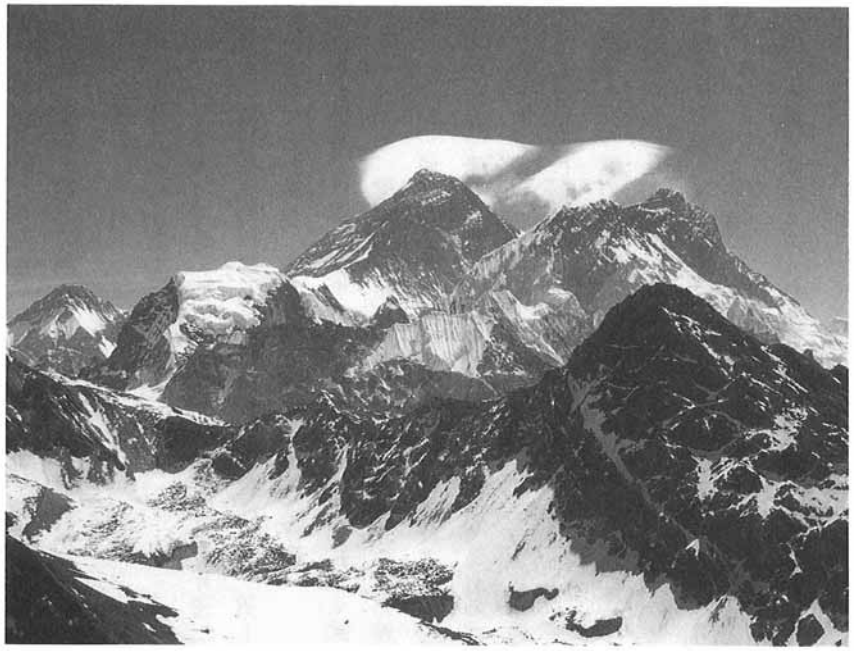
また、道路も無い奥地に住む人々は、殆どが自給自足のため、現金収入が無く、中には出稼ぎの金で多少豊かな家庭もあるが、穀物と野菜を作り、家族や親戚が集まって集落をつくり細々と生活をしているのが現状です。急斜面の段々畑では農機具などは勿論使えず、植え付けから脱穀まで全て手作業で行う。はじめてのフィールド巡回で私が感じたことは、「生きていくための農業、農業は彼らの生存そのものである」という印象だった。

普及活動

任地では今まで、農作業の〝切る〟といった全ての農具は、ククリ（かつて大英帝国との戦いで用いた迫力のある山刀）というネパールの山刀で行っていた。使い慣れた手つきで作業はしているものの、枯れ枝除去や剪定の際に乱暴な切り口になってしまい、枝を傷つけてしまうのである。

そこでスタッフ達と話合いの結果、まずは基本的な剪定法を教えるために、隊員支援経費で、剪定ばさみとのこぎりを用意し、カンキツエリアで使用法のデモンストレーションをしながら価格の二五パーセント引きで販売したところ、中々好評で二十組普及することができた。農民が作業に適した農具を正しく使用することによって、農業に対する管理意欲が増すのであれば大きな進歩だと思う。

村々には目的に応じたグループが設けられ、情報交換をしている。普及員はグループを巡回して講習会や話し合い



を行っているが、優秀なグループでは、月毎のミーティングの際に、お金を集めて積立をし、たまったお金で農具やデモンストレーション用の種などの購入資金に充てている。

私たち普及員は出来るかぎり多くの村人と接して必要な情報を交換し、グループ作りを助けながら村の結束を促すことも大切な役割だと思う。

ドラカ郡の果樹栽培にとって大切な課題は、丈夫な接ぎ木苗を農家自身が育てられることである。私も試に、オフィスの畑にカラタチを植え、台木作りに挑戦したが、生育不良で失敗に終ってしまった。赴任前に繁殖技術をしっかり勉強しておくべきだった、と心から残念に思った。

首都カトマンズにあるJICA園芸プラジェクトの協力を得て、オフィスのあるチャリコット付近の三ヶ所の畑で、日本品種のリンゴ、ナシ、クリのデモンストレーションファームをつくった。気候条件がよく合うのと、植え付け前に土づくりを徹底し、雨季にすそ腐れ病が発生しない様、高植えにしたこと等から、大変良好な生育を見せた。日本の甘くて大きな果実を一人でも多くの現地の人々に食べてもらいたいなあと思う。中でもクリは、全くそれまでドラカ郡に普及されてなかったのだが、カトマンズのマーケットでは、外国人向けに高い値段で売られ、期待は大きい。

ネパール人とのふれあい

フィールド先は、近くて徒歩片道四時間、遠くて片道二日間という赴任当初は信じられない程の山奥にあり、道もない山また山を延々、体力の限り巡回指導にはげむ。

宿泊の農家では隣にヤギが寝ていたり、蚤にくわれて眠れなかったり、髪に毛じらみが発生したり、驚くことの連続だったが、何よりも大自然に暮らす人々の純粋さ、遠くの国から良く来てくれたといって心から歓迎してくれる彼らのホスピタリティーに支えられ、しだいにフィールド巡回が楽しく感じられるようになった。

農業という奥の深い分野に携わり、自分自身の経験不足、技術不足といった不安に悩んだ日々でもあった。自分の父や母の年令の人々を相手に、しかも農業国ネパールで指導をするなんて、今思うと私の拙い指導に真剣に耳を傾け、学ぼうと熱意を示してくれた農民達には頭が下がる思いである。電気のない村でローソクの火を見つめながら交わした会話、つらい山道を歩きながら芽生えたスタッフとの信頼感、協力隊員でなければこのような経験はできなかっただろうと思う。

国民性の違いかな、と思ってはじめは目をつぶって見逃したことも、生活しながら知っていくうちに、譲れないといってけんかになったり、いつの間にか同化していたり、感情の変化と共に暮した二年間だった。

日本人という前に一人の人間であることを、時にはけんかをしながら、時にはお酒を飲みながら、時には大笑いしながらかみしめた。相互理解とか技術移転といった難しい言葉はそこにはなく、心を見せ合わなければ理解できないこと、何となく愛着を覚えた彼らと何かをしてみよう、助けられた分だけ何かお返しをしよう、といった素直な気持が私の協力活動の源であったように思う。

かけがえのない二年間であった。自然のありがたさ、人間の生命力の強さ明るさ、言葉では表しきれない多くのことを農業を通じて学んだ。

青年協力隊に参加出来て本当に良かった、といま実感しています。

（中尊寺山内大長寿院寺族）

中尊寺仏教文化研究所『論集』創刊

〈五月十五日〉

一昨年、教学研究所を「仏教文化研究所」と改組した。一宗門の教学という垣根を外して、それぞれの視座から仏教、歴史文化一般にわたっての研究の集積を意図したものであった。一山雛僧の育成研鑽が「規程」の趣旨であるが、フィールドを広くして、平泉・中尊寺に係わる研究を大いにやってもらいたい。そして、今の段階でできる、それなりの実をあげて道筋をつくっておくことも大切であろうと、それで『論集』創刊に踏み切ったような次第です。

「金色堂／国定指定百年」の年の創刊、というのも時を得ていた。その記念〈対談〉は、内容が濃く、本誌の船出に花を添えていただいた。

大正大学多田孝文氏、東北大学有賀祥隆氏にも寄稿いただいて、一応『論集』の体裁を保つことができました。

早速、多くの方から、「息長くやって欲しい」などの励ましのお手紙を頂戴しました。ご好意に感謝しつつ、期待を裏切らないように、自らにプレッシャーをかけながら、第二号は、あいだ二年も措いて発刊できればと——。

信の構造 …… 千田孝信
法華経と天台大師 …… 多田孝文
座談会 金色堂 国宝指定一〇〇年
…… 鈴木嘉吉・杉本苑子・大矢邦宣・千田孝信
よみがえる「信の風光」
——秀衡の母請託『如意輪講式』を読む—— …… 佐々木邦世
金光明最勝王経金字宝塔曼荼羅図再考 …… 有賀祥隆
文化財レポート
大長寿院大日如来像について …… 伊東史朗
「中尊寺経」四巻 紹介 …… 破石澄元
学窓レポート
正和二年中尊寺衆徒等申状について …… 鈴木亜紀子
「本覚」の概念に関する研究 …… 三浦章興
法華玄義「功徳利益妙」について …… 菅野澄円
中尊寺の成立と中世初期国家の北方支配
——平泉藤原氏と院、摂関家—— …… 菅野成寛

時宜に叶った文化的営為

このたびの貴重な『論集』、御労作がそろっていて、しかも編集にメリハリがあり、見事な論考誌と感服致しました。昨今の寺院、仏教界に対する厳しい、しかしその実は通りいっぺんの批判は、このような優れた文化的営為の積み重ねによって、打破することができると存じます。またマルクス主義や柳田民俗学といった従来の世界観、世界認識の方法が凋落して行く中で、仏教に対する、生きる指針としての、また思想としての要請は、既にかなり高まっており、今後ますます強く大きくなって行くかと思われます。そういう折に、これだけのものを出版されるというのは、誠に時宜に叶ったことと、大きな期待を抱きます。一、二年に一冊ずつくらいのペースで長く続けられますよう、お願い、お祈り申し上げます。

（東京出版社H館 編集者）

観光寺院からの超克を期待

貴重な研究資料『論集』を拝見しました。中尊寺が単なる観光資源ではなく、歴史遺産であり、今日も研究のセンターであることを、世間の方々も認識されることでありましょう。

ご多忙のなかこのような地道な研究を続けられる「中尊寺仏教文化研究所」のご努力に敬意を表します。

（花巻市・七宮滓三）

慈覚会 御影供と「べろべろ」

菅野康純

（瑠璃光院後住）

「慈覚会」は、日本天台宗の第三代座主慈覚大師円仁が貞観六年（八六四）正月十四日、七一才で入寂、その報恩の誠を尽くし供養し奉る法会である。

寺伝では、嘉祥三年（八五〇）慈覚大師開山と伝えられる。

法会は、早朝、最下座の下四人が、慈覚大師の御影を御経蔵（現在宝物館「讃衡蔵」）から遷座するところから始まる。先頭が引金を鳴らし、二人が御影軸の入った長櫃を前後に担ぎ、後尾に一人が従う。本堂道場に入り御影を安置する。

次に世話方より煮染めや、飯、野菜などの供え物の材料が結衆に手渡される。

お供えするものは、三宝の上に飯椀、煮物椀、金紙の水引きを巻いた大根、にんじん、白菜等を高坏に立ててお供えする。合計五つの椀・高坏が三宝に並ぶ。これを「御立て盛」という。

さらに、大皿に焼き餅（げんべた）を置き、五色の弊を垂れ下げた紙垂を突き立て、周りには栗、カヤの実、くるみ、干し柿、昆布などを供える。

御立て盛、げんべた三組を準備し二組を本尊前に供え、御影前には、御立て盛、げんべた一組と団子・香爐・灯明・華を供える。水瓶と高坏状の洗い桶・篠竹に逆三角形に折った弊束を挟んだ「べろべろ」といわれるものを準備する。

法要は、文政の『年中行状記』には「法華懺法・自我偈・圓頓者・回向・御茶献、下四人」と記されるが、明治二十九年より法華懺法でなく「慈覚大師御影供」を修してきた。「御影」とはお姿、「供」とは供養することである。

『慈覚大師御影供』の成立について、現存する写本では『慈覚大師讃』承久二年（一二二〇）が最古で、貞応二年（一二二三）京都大原宗快の写本等がある。現在使用している本も応永三十三年より京都大原勝林院に伝えられたもので、いずれ一二～一三世紀に成立したものと見なされている。

次第は、入堂―僧讃―総礼詞―総礼―導師登礼盤―勧請―佛名―教化―献茶―祭文―大師讃―献茶―六種回向文―佛名―教化―回向―頌讃伽陀―導師降礼盤となる。これに、自我偈・圓頓章・回向して出堂。

「祭文」は、役席が会場中央正面で三礼し読み上げる。大師の徳行を讃え、その末学に連なる一山の僧侶が遺徳を偲ぶ文章で、十五世紀、尭胤親王の御作である。これに古来より伝承された中尊寺独特の節をつけて読むのである。

法要の最後に、御影前で役席が洗い桶の上で「べろべろ」を回し、その上から次座の者が水瓶より幣束の部分に水を掛ける。

この作法は伝承されてきたもので、その意味が明確ではない。江戸時代の見聞記である『菅江真澄遊覧記2』「かすむ駒形」天明六年（一七八六）正月二十日の記に、毛越寺常行堂の祭礼に関して「熱田の社の正月十一日のべろべろ祭に兆鼓ふる神人の冠のごときかうぶりをいただき、白衣清げに着なし、王の鼻の面をかがふり、左の袖に水精の数珠を掛け、鳩の杖を衝て、右に白幣（紙のへいそく）を持ち、桑の弓、蓬の箭を負ひて、祝詞を立ちながらとなふ。ひめたる事とてつゆも聞えず。（略）」と記されており、本引用の注には「べろべろ祭は宮中で行われた踏歌祭の別名で多人数が足を踏みならし踊り、延年・豊作を祈る歌詞を歌う行事」と記されている。菅江真澄の見た行事は、当山で春五月白山祭礼に行われる「古実式三番祝詞」と同様のものであるらしいことが記述から読みとれる。踏歌祭・古実式三番双方の共通していることは「延年・豊作を祈る」ことである。宮中正月行事は二十日頃まで続く。

当山も修正会に続く「慈覚会」を、正月行事の区切りとして「延年」を法楽として行っていたのかもしれない。

（企画室・木瀬公二）

惜別

「文化財の保存科学という分野の草分けの人でした」と東京国立博物館の鷲塚泰光次長（五八）。本年六月、東博修復管理官・石川陸郎氏が亡くなられた。石川さんは、収蔵品を傷めずに保存し、入館者に、いかによく見てもらうかの専門官だった。

高さ二メートルの仏像は、頭にも足にも同量の光が当たる工夫をした。それが陶製ならば、朝が明け切る前の光をつくり出そうとした。岩手・中尊寺金色堂の修理では、目で見て点検していた時代にX線で柱のしんまで写し出した。博物館のための、紫外線を出さない蛍光灯や、存在感の薄い陳列ガラスを、業者とともに開発した。

全国約百三十の博物館や美術館は、石川さんの指導で開館した。

埼玉で気温が四〇度を超した五日の葬儀。東京・池袋も酷暑で、参列者は、寺のオオイチョウの下に逃げ込んだ。東京国立文化財研究所の渡辺明義所長（六一）は「その業績は、大英博物館日本ギャラリーや東京国立博物館などで輝き続けるでしょう」と弔辞を読んだ。

四年前に東京国立博物館に異動し、四十年の蓄積すべてを、特別展示施設となる平成館に注いだ。長男の剛さん（二五）は「日本の展示施設のお手本にしたい」という父の言葉を覚えている。

二年後の開館を前に完成した建物が六月二十三日、博物館に引き渡された。その四日前に倒れ、安心したかのように五日後に逝った。

平成八年正月中尊寺「金盃披き」の日

（文責　長崎）

保存科学とともに

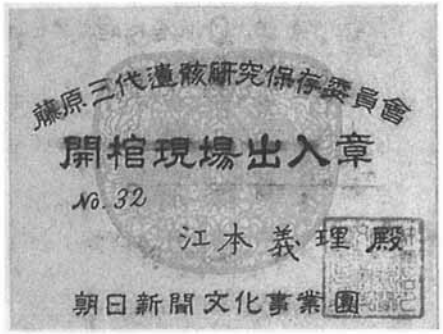
江本義理（よしみち）氏がその発展に一生を捧げた「保存科学」という学問は、最近でこそ一般に認められるようになったが、この言葉をわが国で最初に掲げ進展に努めたのは、彼の属した東京国立文化財研究所の「保存科学部」であった。

文化財の研究にとって素材の材質、構造、産地の推定、年代決定などの研究が重要なことは勿論であるが、貴重な先人の遺産を後世に伝えるためには、文化財の保存環境の研究調査、管理そして修復は重要不可欠な課題である。また、文化財資料の保存技術の確立も保存科学の重要な使命といえる。

江本氏が大学卒業後最初に先輩の岩崎友吉氏とともに取り組んだのは、法隆寺の金堂の壁画の保存であった。この事業は大正時代からおこなわれていたが、戦後、本格的に取り組むことになっていたのである。しかし、不幸にも金堂は昭和二十四年の失火で焼け、焼け残った壁画の修復へと調査の目的は変わっていった。

昭和二十五年には朝日新聞文化事業団の主催で平泉中尊寺の藤原氏の遺体の学術調査がおこなわれ、江本義理氏もその一員として調査に参加した。これが江本氏にとって、文化財調査に本格的に手を染めた初めだったといえよう。

文化財の研究には、戦前既に彼の師の柴田雄次氏らによって科学的手法が導入されてはいた。文化財には貴重品が多く、たとえ資料が入手出来たとしても、ごく微量の断片でしかない場合がほとんどである。また使える研究手段も極めて限られていた。文化財を非破壊的手段で調査研究を進めることが必要であった。江本氏はその分析技術の確立に意を注いだ。



〈平成四年四月十一日死去　六十七歳〉

風信 / 語録

南　奎雲

（盛岡タイムス・杜陵随想）

洗　心

「皆さん、手が汚れたらどうしますか。洗いますね。体が汚れたらシャワーを浴び汚れを落としますね。一体、心が汚れたらどうなさいますか」

七月十三日、平泉町中尊寺で、金色堂国宝指定百年祭の一行事として行われた「法華経一日頓写経会」での千田孝信貫首のご挨拶の冒頭のお言葉です。

私は、写経に関心を寄せてはいたが、正式の写経会には初めて参加した。

中尊寺本堂には百五十余人が県内外から参集した。「禮法華経儀」の正式な作法にのっとって写経が一斉に行われた。

八巻、二十八品、六万九千三百八十四字が心を込めて浄書。

外は三十度を超す猛暑である。ところが、本堂の中はシーンと静まり返って物音一つしない。不思議な雰囲気である。

私は一瞬、杜荀鶴の「安禅必ずしも山水を須いず、心頭を滅却すれば火自ら涼し」の詩句を思い出した。暑さも感じなければ、自分が今、どこにいて何をしているかも分からないほどに集中できる。

ただひたすら経文を浄書する。昨日のことも、明日のことも頭にはない。ただ、ただ意味もよく分からない漢字を一字一字心を込めて祈るように浄書する。

これだ。これが心の洗濯なのだと体験的に納得する。

中尊寺が建立されて初めての本格的な写経会であったと千田孝信貫首は感動を込めて法話をしめくくった。

「法華経の根本精神は、一切衆生。生きとし生けるものが、すべて仏となって開く芽を持っている。人間はもちろんである。あの神戸の連続児童殺傷事件の十五歳の中学生にも、実は仏となって開く芽を持っているのです。草木でも、草花でも石ころでもみんな存在価値があるのです。（中略）本当に大切な精神は、大慈大悲・諸法実相…後略」

心の垢や汚れがたまる一方の毎日であったが、今回の「法華経一日頓写経会」は、心の洗濯ができたような一日であった。

（書道家・住吉町在住）

風信 / 語録

出光裕治

（日本経済新聞・交遊抄）

貴重な話

「先般はご来詣光栄のいたりです。同窓会での拝眉とは一味違う、さわやかな清遊を感謝しています。ご多忙の御身、くれぐれもお慈しみの上、邦国のためご活躍下さい」。先日、平泉中尊寺・貫首の千田孝信さんからはがきが届いた。

五月に仙台へ出張した折、貫首自ら金色堂はじめ寺全域を案内してくれた。仕事に追われる私にとり、俗界を忘れる貴重な体験だった。この時に感じられた温かい人柄がはがきの行間にもにじみ出ていた。

千田さんとの出会いは戦時中の一九四三年。旧制浦和高校の寮で同室となり、一年先輩として快く迎えてくれた。学校の勉強はほどほどに本をむさぼる姿は哲学者さながらで、自然と畏敬の念を抱くようになった。彼は京大哲学科を卒業後、日光日光観音寺の住職を継いだが、戦後のゴタゴタで長らく音信が途絶えていた。

十年前、浦和市で開かれた同窓会で約三十年ぶりに再会した。五年前から中尊寺貫首に就任し、すっかり奥州平泉文化への造けいを深めたようだ。今年二月の同窓会では次のような興味深い話を聞く機会を得た。

「藤原文化は東北の粗削りだが素直な気風と、京都に負けない第一級の文化を目指す憧憬との二面性から生まれた。その結実が中尊寺金色堂である」「宮沢賢治も同質の精神を受け継ぎ、風土に根をおろしながら宇宙的な広がりのある詩の世界を追い求めた」

物事を突き詰めて考えていく観察眼の鋭さに感服した。これからも時々、貴重な話を聞かせてもらえればと思っている。（出光興産社長）

福山梓子（桐朋女子中学校生徒）

先日はお話をきかせていただき、ありがとうございました。

一字金輪佛頂尊を見ることができて、とても感激しています。穏やかな雰囲気にひかれました。もう二度と拝めないことを思うと残念ですが、なおさら今回の体験を大切にしたいと思います。

〔陸奥教区宗務所報〕

□平成八年
十月十六日
陸奥教区法要　四五名　延暦寺根本中堂
十一月十七日
「一隅を照らす運動宮城福祉大会」
一、一四〇名　於仙台市立正佼成会会道
十一月三十日
托鉢　二八名　一関市内
十二月一日
教区研修会　三二名　陸奥教区宗務所
講師　横浜大聖院多田孝文師

□平成九年
六月二十日
一日内局　五四名　於一関サンルート
七月二日
布教師東北・北海道地区協議会及び研修会
八名　飯坂温泉
九月五日
布教師公開講座
二五名　福島民報ロイヤルホテル

第二部中尊寺関係

□褒賞　（平成八年十一月二十日）
住職三十年勤続表彰
地蔵院　佐々木秀円
大長寿院　菅原光中
一宗公職歴任
観音院　清水秀澄

□寺庭婦人得度　（平成九年五月十一日　於本山）
円乗院寺婦　佐々木花径（典子）
積善院寺婦　佐々木禎心（禎子）

□教師補任　（平成九年四月二十一日）
僧正　円教院　住職　千葉快恩

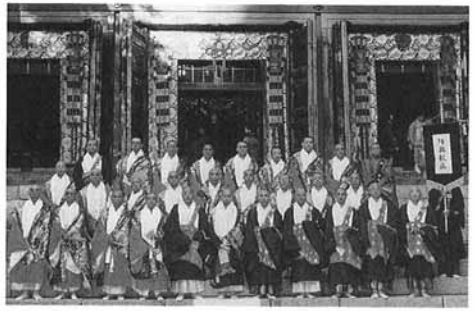
□平成九年度開坦伝法履修
真珠院法嗣　菅野澄円
大長寿院法嗣　菅原光聴

執務日誌抄

平成八年十月～九年九月

平成八年

◇十月
一　日　月次大般若会（本堂）
酒田三十六人衆代参。（鐙谷誠一氏夫妻）
二　日　慈眼会（本堂）
菊まつり協賛会役員会
浄土宗熊本県東岸寺住職ほか阿波之介墓参来山。
三　日　菊まつり会場設営工事安全祈願（本堂前庭）
十一日　スリランカ共和国ケニア寺管長参拝（貫首挨拶）
十三日　月例法話の会（円教院後住快俊）
十四日　釈尊院五輪塔、願成就院宝塔補修開眼法要（導師貫首）
美術院所長小野寺久幸氏ほか文殊菩薩像修理につき来山。
十五日　貫首講話（県立磐井病院看護婦会）
十六日　作家大下英治氏参拝。



十七日　比叡山延暦寺根本中堂において天台大師一千四百年大遠忌　陸奥教区法要厳修。（導師宗務所長ほか当山より十二口出仕）
福聚教会中尊寺支部奉詠。
京都大徳寺大仙院尾関宗園師来山。（貫首案内）
十八日　貫首講話（一関市忠臣蔵サミット）
十九日　山内白虎堂例祭
二十日　第十一回菊まつり開幕法要（十一月十五日まで）
月例法話の会（地蔵院後住秀厚）
二十六日　一山協議会（金色堂国宝指定百年記念事業について）
二十七日　前ケンブリッジ大学長ピーター・マサイヤス氏来山。（貫首、茶室にて挨拶）
二十八日　秀衡公御月忌（金剛界曼荼羅供　本堂）

文化庁建造物課大和調査官来山。（五輪塔、宝塔修理工事俊工確認）

二十九日　執事長、山形市芭蕉サミット出席。

三十日　秋能申し合せ（能楽堂）

三十一日　中村直前岩手県知事弔問（総務春興出向）

浄土宗宮林昭彦師一行団参。

◇十一月

一　日　秋の藤原まつり開幕

藤原四代公追善法要（式衆・稚児　金色堂まで練行）

二　日　菊供養会（本堂）

（貫首法話、参加一〇〇名）

三　日　能「経政」「猩々」

狂言「盆山」、仕舞（地元「小桜会」）

菊まつり撮影会

八　日　日光輪王寺より小暮道樹師ほか来山。（参拝下見）

九　日　天台寺法嗣菅春栄師葬儀（一老出向）

盛岡喜桜会六十周年記念祝賀会（貫首ほか出向）

十　日　菊まつり表彰式

十七日　陸奥教区「一隅を照らす宮城福祉大会」（於仙台市立正佼成会会道、貫首法話）

北総教区星徳寺団参。

福島教区法光寺団参。

福島教区日輪寺住職高松義寛師ほか参拝。

栃木県保護司連盟一行参拝（貫首案内）。

十八日

二十日　職員研修旅行第一班（～二十二日、倉敷・書写山行）

町観光協会五十周年記念式典。貫首講話、中尊寺能「猩々」披演。（於平泉文化史館ホール）

二十一日　貫首、浅草寺普山式に出席。（随行釈尊院成寛）

仙台市富士通社員研修講話（講師　執事長）

二十三日　平泉文化会議所「第四回セミナー東方」（於金鶏荘、田口昌樹「菅江真澄・人と旅」濱田直嗣「平泉と伊達」一山より多数参加）

天台会御逮夜法要（結衆勤本堂）

二十四日　天台会（御影供　本堂）

二十五日　日光中禅寺読誦会一行参拝。

二十六日　一山協議会

二十七日　職員研修旅行第二班（～二十九日）

二十九日　ハワイ別院荒了寛師個展（於仙台市、執事長出向）

三十日　陸奥教区一斉托鉢（一関市内、一山より七名参加）

◇十二月

一　日　月次大般若会（本堂）

陸奥教区研修会（講師　横浜大聖院多田孝文師、於大書院）

二　日　明年「金色堂国寶指定百年記念祭」催行について地元報道関係記者発表（七月一日～十一月十日）

山内年末風景、マスコミ一斉取材。

平成七年度事務監査

三　日　ロシア映画監督ソクーロフ氏ほか参拝。

七　日　薬師会（讃衡蔵）

八　日　延暦寺現性院山形法湛師ほか参拝。

十四日　弥陀会（本堂）

十七日　臨時一山会議

白山会（本堂）

二十日　境内諸堂佛像煤払い。（各社取材）

二十一日　月例法話の会（利生院円融）

二十四日　文殊会（経蔵）

ペルー日本大使館人質早期解決祈願厳修。（一山総出）

二十八日　恒例御供餅つき

三十一日　午後三時、総礼

NHKラジオ全国放送「行く年来る年」除夜の鐘放送

平成九年

◇一月

一　日　新年祈祷護摩供修行（本堂）

六時、東山町「若水送り」

十時半、総礼。引き続き修正会　釈迦供（本堂）

二十時、結衆堂籠り（開山堂）

二　日　九時半、正月祈祷護摩供（本堂）

十時、修正会　薬師供（讃衡蔵）

十三時、謡初め「東北、老松、高砂」（於本坊広間）

三　日　九時半、正月祈祷護摩供（本堂）

十時、修正会　山王供（山王堂）

十一時半、元三会　慈恵供（本堂）

四　日　修正会　薬師供（瑠璃光院薬師堂）

五　日　修正会　文殊供。（経蔵）

大般若会（利生院弁財天堂）
梵焼供（結衆、開山堂）
結衆、本日より寒修行。（町内托鉢）
六　日　修正会　釈迦供・月山供（釈迦堂）
町関係者、年始挨拶に来山。
七　日　修正会　白山十一面供（本堂）
大般若会（本堂）
十四時、修正会　弥陀供（金色堂）
春の神事能番組協議（本坊）
町新年交賀会（執事長出席）
八　日　修正会　薬師供。（讃衡蔵）
一字金輪仏法楽
十三時、恒例「金盃披き」
十　日　執事長、県庁ほか新年挨拶回り。
十四日　慈覚会（御影供　本堂）
月例法話の会（薬樹王院澄仁）
十六日　経蔵本尊騎師文殊菩薩新像制作状況視察（執事長ほか、三重県阿山町、仏師・服部俊慶師工房に出向）
十七日　阪神大震災三周年追悼法要（一山総出仕）
二十日　第二百五十四世天台座主梅山圓了猊下には、本日早暁御入寂の由。
二十二日　節分会講中総会
二十五日　山内積善院先住三十三回忌法要（貫首導師、一山総出仕）
二十六日　文化財防火デー（地域消防団防火演習）中尊寺特設消防隊出動。
二十八日　菊まつりコンテスト審査会
一山協議会

◇二月

一　日　月次大般若会（本堂）
三　日　恒例大節分会。関取・琴錦関を迎え、一〇五名の歳男歳女と町内園児が豆を撒く。本日にて寒修行満行。
九　日　神事能シテ方稽古始め。
十三日　延暦寺国宝殿仏教東漸壁画完成祝賀会（東京・貫首出席）
十四日　涅槃会御逮夜（本堂）
十五日　涅槃会（本堂）
月例法話の会（地蔵院秀円）
十七日　北参道ウォーキングトレイル（国庫補助事業）工事開始（～四月八日）
十　日　茨城教区法圓寺団参。（貫首法話、四〇名）
二十一日　前座主本葬儀出席のため、執事長登叡。
二十四日　門前会研修旅行（天台寺・古牧温泉行。貫首ほか）
二十六日　平泉町観光協会総会（執事長ほか出席）

◇三月

一　日　月次大般若会（本堂）
恒例中尊寺毛越寺両山懇親会
二　日　貫首講話（平泉町健康福祉まつり）
東山町生涯学習（講師　仏文研邦世　於衣川荘）
五　日　一関市観光従業員研修会（講師　執事長）
七　日　韓国観光旅行エージェント一行参拝。（案内　参拝事業部慎宥）
八　日　菊まつり協賛会役員会
十　日　一山協議会
十五日　老分懇談会
十九日　定例一山会議
基衡公御月忌（胎蔵界曼荼羅供　本堂）
月例法話の会（真珠院澄順）
二十三日　貫首、京都大徳寺大仙院御遠忌法要に出向。
二十四日　開山会護摩供（開山堂）
二十七日　平泉町観光協会研修会（講師　執事長）
三十日　中尊寺檀信徒総代会総会

◇四月

四　日　月次大般若会（本堂）
一山事務局役職、職員辞令交付並びに事務引き継ぎ。
五　日　一関地方振興局局長ほか新任官公庁長、地元小中学校転入者挨拶に来山。
四　日　寺庭婦人会岩手支部役員会
五　日　陸奥仏教青年会総会
六　日　大徳寺大仙院尾関師来山。
八　日　佛生会（本堂）
月例法話の会（大長寿院光中）
十三日　恒例花まつり（執事長法話、参加三〇〇名）
菊まつり協賛会総会
＊新会長に一関信用金庫理事長八重樫次男氏を選任。
十七日　山内観音院、観音講
十九日　地元老友会境内清掃奉仕。
二十一日　一山寺院共済互助会総会
月例報告会
二十四日　陸奥教区会、一隅理事会
二十五日　韓国全羅北道漆関連技術視察団来山。（総務春興案内）
二十六日　毛越寺寿徳院「法話の会」（大長寿院光中、出向法話）
二十七日　北上市歓喜院開基森園法瑞和尚追悼法要（二老常住院高円ほか出仕）
二十八日　神事能申し合わせ（能楽堂）
二十九日　第十八回西行祭短歌大会（講演「槻の木」代表来嶋靖生氏）

◇五月

一　日　春の藤原まつり開幕
法要、稚児行列、常の如し。
二　日　開山護摩供（開山堂）
三　日　源義経公東下り行列
川西剣舞奉納。
四　日　式三番、神事能「竹生島」
五　日　能「八島」
六　日　山王講（山王堂）
十五日　岩手県観光連盟総会（於安比高原、参拝事業部慎宥出席）

一関地区法人会理事会（総務春興出席）
十七日　仙台薪能（二老常住院出向）
十八日　貫首仮入山五周年労いの会
月例法話の会（願成就院高信）
十九日　県観光推進実行委員会（盛岡、執事長出席）
二十一日　貫首講話（県南高等学校ＰＴＡ連合会、於ベリーノホテル）
二十二日　いわい文化観光振興実行委員会発足会議（執事長出席、於ベリーノホテル）
二十三日　寺庭婦人会岩手支部総会
二十四日　藤島亥治郎先生の白寿を祝う会（盛岡、執事長ほか出席）
二十五日　隣山毛越寺「曲水の宴」（執事長出席）
二十六日　月例報告会
二十九日　貫首、天台座主伝燈相承式に登叡（随行康純）。
三十一日　中尊寺杯（秋田・宮城・岩手選抜中学校）バスケットボール大会開会式（総務春興出席）

◇六月
一　日　一関市願成寺山門落慶法要（二老常住院出席）
大般若会（本堂）
四　日　伝教会（御影供　本堂）
七　日　山家学会（於大正大学、仏文研主任邦世発表）
八　日　ふるさと平泉会総会（東京・執事長出向）
貫首法話（陸奥教区一部寺院会、於宮城県民会館）
十　日　勤務者定期健康診断
十一日　山内真珠院庫裡落慶法要（一山総出仕）
県招待五ヵ国大使夫妻来山。（貫首、茶室にて挨拶）
十五日　延暦寺副執行即真尊霊師、法燈護持会会員証伝達のため来山。（貫首拝受）
二十日　自在房蓮光忌法要（本堂）

宗務庁一日内局（貫首ほか一山多数出席、於ホテルサンルート一関）
二十一日　月例報告会
二十三日　一関タクシー社内研修（～二十六日、総務春興）
二十四日　月例法話の会（大徳院後住慎

宥）
二十六日　総代研修旅行、日光方面（～二十七日、二老ほか参加）

◇七月
四　日　平泉町「歴史講座」（講師、仏文研邦世）
五　日　東京国立博物館保存修復管理官、石川陸郎氏葬儀（東京、参務秀円出席）
六　日　貫首講話、（九州地方布教師会公開講座、別府市、随行澄照）
青森蓮乗院団参。
七　日　新平泉町長鈴木和博氏、就任挨拶のため来山。
文化財建造物協会工藤満氏、金色堂巻柱復製のため調査に来山。
九　日　平泉小学校六年生「ふるさと学習」（講師　執事長）
十　日　ＮＨＫ盛岡文化センター史学教室（講師　仏文研邦世）
十二日　仙台満願寺団参。
十七日　清衡公御月忌（胎蔵界曼荼羅供　本堂）
十八日　境内本坊付近に熊出没。（一関保健所より担当者来山　対応）
十九日　第二回水かけ神輿宵宮（執事長出席）
西磐井地方郡市仏教会「ウエーサカ」法要（法務長生・総代八名出席、於花泉町長寿寺）
二十日　平泉総社神輿渡御。（金色堂前にて貫首挨拶）
外務省文化交流部長榎泰邦氏参拝。（貫首、茶室にて挨拶）
二十七日　本堂前庭の池で小鴨九羽誕生、参拝客の人気を集める。
二十八日　一山協議会
「国際青年村」一行参拝。（四〇名）
三十一日　中尊寺新讃衡蔵建設委員会（鈴木嘉吉委員長ほか十三名出席、～翌一日）

◇八月
一　日　月次大般若会（本堂）
二　日　浅草寺一行十九名参拝。
三　日　境内落雷にて火災報知器に被害。
本日より拝観時間の延長（～十七日）
四　日　貫首、「平和の祈り」参列のため登叡（随行長生）
〈平和の鐘〉打鐘、十五時半。
五　日　町内教職員研修会（講師　仏文研主任邦世）
七　日　歌人馬場あき子氏来山。
十　日　梵焼供（結衆、常の如し）
十四日　第二十一回中尊寺薪能
能「吉野静」狂言「咲嘩」
能「黒塚」
十六日　第三十三回大文字まつり
十七日　前中尊寺菊まつり協賛会長上野隆二氏告別式（貫首弔辞）
二十日　毛越寺施餓鬼会（一老　観音

院随喜）

二十一日　上海博物館陸明華氏ほか来山。（貫首案内）

二十二日　乾侑美子氏（「写経の古寺巡礼」著者）来山。（貫首挨拶）

NTTドコモ副社長立川敬二氏参拝。（総務春興案内）

二十三日　大施餓鬼会御逮夜（本堂）

二十四日　大施餓鬼会執行（本堂）

岩手県知事増田寛也氏ほか来山、秘仏拝観。（貫首、茶室にて挨拶）

二十五日　群馬教区普門寺団参。（四四名）

二十六日　旅行エージェント懇談会出席者視察。（参拝事業部慎宥案内）

二十八日　早稲田実業高校自主研修にて来山。（指導　仏文研成寛）

三十一日　薬樹王院前住内室逝去。茨城西福寺団参。町内竜玉寺大施餓鬼会（四老利生院円融　随喜）

山形県瀬見温泉亀割観音例祭（二老　常任院高円出向、随行秀厚）

◇九月

一　日　月次大般若会（本堂）

月例報告会

三　日　泰衡公御月忌（金剛界曼荼羅供　本堂）

岐阜県白鳥町一行参拝。（一五名）

四　日　長野常楽寺住職半田孝淳師御夫妻来山。（貫首案内）

五　日　山内薬樹王院前住内室葬儀（一山総出仕）

六　日　栃木小山高校PTA一行参拝。（五〇名）

山形教区一二〇名団参。

群馬教区寺庭婦人会参拝。（三五名）

七　日　貫首登叡。（台密十三流受法のため。同真珠院澄順、～十二日）

早稲田大学綾部光洲氏一行参拝。（一五名）

宮城東雲寺団参。（一七名）

八　日　酒田三十六人衆代参。（田中英夫、粕谷精一両夫妻）

金ヶ崎総合大学一行来山。（講師　仏文研邦世）

九　日　修学旅行誘致懇談会（札幌、函館、総務快俊出向）

十　日　紫波町五郎沼薬師神社例祭（円教院快恩出席、随行長生）

秋田県琴丘町長工藤政吉氏参拝。（執事長挨拶）

十一日　「詩情豊かな岩手路」誘客説明会（大阪、参拝事業部慎宥出向）

十二日　岐阜県白鳥町石徹白大師講一行団参。（四三名）

東日本放送報道制作局長備前島文夫氏来山。（番組制作打ち合わせ）

十五日　紫波町蜂神社例祭（二老出向、

随行康純）

十六日　立石寺夜行念佛講一行団参。（一一〇名）

日本印度学仏教学会江島理事長来山。（執事長対応）

十七日　貫首講話（東北地方建設局、随行秀厚）

十九日　赤堂稲荷例祭

二十日　平泉町文化財愛護少年団研修、奉仕作業。（講師、法泉院春興）

二十一日　月例報告会

二十三日　秋彼岸会（法華三昧修行　本堂）

月例法話の会（法泉院春興）

二十六日　東北大学有賀祥隆教授ほか、金光明最勝王経調査のため来山。（管財澄元対応）

二十七日　日光輪王寺輪青会一行参拝。

二十八日　前経団連会長斉藤英四郎氏参拝。（貫首、茶室にて挨拶）

二十九日　貫首講話、東北大学へ出向（第四十四回材料と環境討論会、随行澄照）

三十日　菊まつり協賛会役員会

いつくら国際文化交流会一行参拝（貫首挨拶）

宮城県教育長鈴鴨清美氏、東北歴史博展の件にて来山。（管材澄元応対）

◇十月

一　日　月次大般若会（本堂）

菊まつり工事安全祈願。（本堂前庭）

女流本因坊戦前夜祭（一関市、執事長出席）

二　日　慈眼会（本堂）

三　日　奥州藤原三代ゆかりの地交流会（田辺市、執事長出向）

三崎良周師夫妻来山。（貫首、仏文研邦世応接）

五　日　湯沢市文化財保護協会一行参拝。（二一名　法話　仏文研邦世）

六　日　北総泉倉寺団参（二三名）

栃木延命寺団参（二〇名）

日光浄土院団参（二〇名）（それぞれ貫首、本堂にて挨拶）

七　日　「叡中会」（仙台秋保温泉、貫首出向）

八　日　「叡中会」一行参拝

全国史跡整備市町村協議会大会一行参拝

九　日　貫首講話（西磐井地区公立幼稚園研究大会）

十　日　一山協議会、月例報告会

十二日　瑞巌寺平野宗浄管長、中国人書家李凌氏を伴って参拝。（貫首、茶室にて挨拶）

十三日　栃木教区布教師会参拝。（一三名）

十四日　浄土宗長野教化団理事参拝。（一二名）

十五日　貫首講話（一関市内小中学校長会研修）

十七日　「茶和会」一行参拝。（一四名、貫首、茶室にて挨拶）

中尊寺杯野球大会閉会

十九日　月例法話の会（円乗院邦世）

二十日　菊まつり開幕法要（本堂）

二十一日　ライオンズクラブ前国際会長アウグステイン　ソリバ氏ほか参拝。（貫首、茶室にて挨拶）

二十二日　埼玉県仏教青年会参拝（七名）

松井建設松井角平社長来山。

二十三日　町遺族会戦没者追悼式（本堂）

二十四日　経蔵本尊文殊菩薩像、抜魂法要（経蔵）

川越長徳寺団参（四〇名）

二十五日　栃木城興寺団参（一九名）

二十六日　兵庫圓教寺団参（四〇名）

二十七日　秋能申し合わせ（能楽堂）

サントリー文化財団鳥井信一氏ほか六〇名参拝（本堂にて貫首挨拶）

能美防災㈱卯之木十三会長参拝（執事長挨拶）

二十八日　秀衡公御月忌（金剛界曼荼羅供　本堂）

三十一日　羽生市立村君小学校三十一名平泉の歴史学習（講師　法泉院春興）

仏画調査のため岩手県立博物館へ出向（管財澄元　十一月二日まで）

◇十一月

一　日　秋の藤原祭開幕法要、稚児行列、常の如し

二　日　菊供養会

三　日　能「経政」「秀衡」・仕舞（地元・小桜会）

菊まつり撮影会

四　日　横浜市大聖院多田孝文師参拝

東京都正法院田島章江師参拝

七　日　町内一人暮し老人交流会（講師　法泉院春興）

八　日　菊まつり表彰式

九　日　建設省東北地方建設局長青山俊樹氏参拝（執筆長案内）

平泉文化会議所セミナー「東方」講演会共催。（於本堂、草柳大蔵氏「新世紀を迎える日本人の価値観」、植村和堂氏「写経史の中の中尊寺経」）

写経（しゃきょう）のおすすめ

敬白

中尊寺では、平成九年七月一日より十一月十日まで「金色堂国宝指定百年記念祭」催行し、その中心となる事業として、法華経並びに一万巻般若心経奉納会を行い、皆様のご協力のもと、法華経八巻二組、般若心経三、〇〇〇巻を金色堂に奉納致しました。

「摩訶般若波羅密多心経」（般若心経）とは何か。摩訶（マハー）は、大きな・勝れたということ、般若とは、菩薩の特性を総括した知恵の意味です。

般若心経とは、つまり仏教の真髄（エキス）の経文というタイトルです。

よく、「色即是空」という辞句を耳にした方もいらっしゃいましょう。これは「目に見えるもの」そのまま「空」である、だから事物に「とらわれない心」が大切だ、と教えているのです。そして般若心経は、転禍為福の基、厄難消除の効用があるといいます。人世の苦を救うと説かれます。

それでは、「空」を身につけるにはどうしたらいいのか。一つには声をを出して読むこと（読誦）です。そして、経を書写することなのです。

忙しい現代、不安な時代だからこそ、どうしたら自分の心を清々しく、どっしりと安定させておけるか、ひとつ工夫がほしいところです。

浄机に向かって、墨をすり、経の文字を写す、一心になって筆を運ぶ。忘れていた大切なものに気づかれるかも知れません。

皆様の強い希望により、今後とも写経の寺としてこの事業を続けて参ります。

合　掌

天台宗東北大本山

中　尊　寺

（事務局　法務部）

浄財御奉納者　御芳名

平成八年

九　月　東日本合唱祭様　八萬円
東京都　大正大学（校外講座）様　拾萬円
宮城県　長昌院様　三萬円
第三回女性消防団員活性化岩手大会様　九萬円
十　月　東京都渋谷区　平岡文夫様　五萬円
京都市　大仙院様　拾萬円
比叡山双葉会様　四萬円
日光高校様（黒髪会）　三萬円
大正大学教授宮林昭彦様　三萬円
十一月　一関信用金庫様　拾萬円
河北新報様（十二社会）　三萬円
盛岡喜桜会様　五萬円
栃木県保護司連盟様　三萬円
泰野市伊勢原歯科医師会様　三萬円
日光山中禅寺様　三萬円
中禅寺読誦会様　三萬円
十二月　横浜市　大聖院様　三萬円
一関信用金庫様　五萬円
北上市　高橋妙斎様　五萬円
平泉観光写真社様　七拾萬円

平成九年

一　月　小岩金網株式会社様（節分会）　拾萬円
二　月　呉市平原町　龍玄院様　三萬円
三　月　日光市　㈱小林商店様　拾萬円
四　月　東京都　小西晫也様　二拾萬円
平泉郵便局長様　五萬円
京都市　大徳寺大仙院様　拾萬円
五　月　㈱総合ビジョン様　五萬円
東京都　西門寺様　三萬円
六　月　京都馬主協会様　三萬円
一関タクシー様　三萬円
七　月　宮城県迫町　今野孝一様　五萬円
八　月　東京都　浅草寺様　四萬円
東京都　㈱久志本様　五萬円
浄土宗岩手教区様　五萬円
東日本合唱祭様　八萬円

群馬県　普門寺様　五萬円
茨城県　西福寺様　三萬円
九　月　上田市　常楽寺様　五萬円
山形教区布教師会様　五萬円
早稲田大学オープンカレッジ書道会様　三萬円
群馬教区寺庭婦人会様　三萬円
石巻市　東雲寺様　三萬円
仙台市上杉山中学校両親学級様　四萬円
岐阜県白鳥町石徹白大師講様　九萬円
日光山輪王寺輪青会様　三萬円
東北電力㈱様　拾萬円
十　月　前沢町　鈴木嘉子様　拾萬円
全国史跡整備市町村協議会様　拾五萬円
日光市　浄土院様　三萬円
栃木市　延命寺様　三萬円
松島町　瑞厳寺様　三萬円
一関市内小中学校長会様　三萬円
茶和会様　五萬円
大津市　華王院様　三萬円
平泉ライオンズクラブ様　三萬円
姫路市　圓教寺様　三萬円
花巻市　鈴木工房様　三萬円
大阪市　㈶サントリー文化財団様　三萬円
十一月　岩手県川崎村　丸卓建設様　三萬円
佐野市　中尊寺講一同様　四萬八千円
日光市　観音寺観音講様　三萬円
横浜市　大聖院様　三萬円
秦野市　命徳寺様　三萬円
一関市　一関信用金庫様　拾萬円
宮城県迫町　今野孝一様　五萬円
栃木県　徳性院様　五萬円
日光市　日光高校三一会様　五萬円
富山市　大畑きよみ様　三萬円

曼荼羅結縁勧募

平成八年
十一月　鈴木四郎様(総代)　九萬四千円
千葉清様(総代)　拾萬四千円
高橋幸夫様(総代)　四萬三千円
菅原善文様(総代)　四萬九千円
佐々木文弥様(総代)　五萬七千円
葛西光男様(総代)　七萬八千円
佐々木國夫様(総代)　拾一萬五千円
千葉勇一様(総代)　三萬二千円
三浦六男様(総代)　六萬四千円
菅原良悦様(総代)　四萬九千円
葛西文治様(総代)　七萬八千円
岩渕文雄様(総代)　三萬八千円
岩渕汪様(総代)　四萬四千円
十二月　平泉町　岩間洸様　五萬円
小野寺貢様(総代)　七萬七千円

平成九年
一　月　平泉町　男山酒店様　五萬円
岩手県滝沢村　千葉昭様　一萬円
平泉町　㈲芭蕉館支店様　五萬円
平泉町　西行苑㈲様　五萬円
花巻市　花巻温泉様　拾萬円
平泉町　㈲銅盛板金工業様　三萬円
平泉町　丸庄様　五萬円
平泉町　㈱平泉観光レストセンター様　五萬円
平泉町　㈲千葉製材所様　三萬円
平泉町　朝田建設㈱様　五萬円
平泉町　㈲平泉観光写真社様　五萬円
一関市　いつくし園様　五萬円
平泉町　一関信用金庫平泉支店様　五萬円
平泉町　小岩金網㈱様　拾萬円
平泉町　泉橋庵様　三萬円
宮城県迫町　今野玲子様　五萬円
二　月　平泉町　㈲泉商店様　五萬円
六　月　一関市　七田芳弘様　二萬円
十二月　平泉町　川嶋印刷㈱様　五萬円
平泉町　得田和明様　一萬円
平泉町　南館廣太郎様　一萬円
一関市　佐藤太郎様　一萬円
一関市　三浦祐次様　一萬円
東京都　只野悦元様　一萬円

総額　百九拾六萬五千円

不動尊祈願

平成八年九月～平成九年十月
青森県　盛田悠三様　七萬円
他に供物

平成八年九月～平成九年十月
川崎村　佐藤卓三様　拾四萬円

平成九年一月・四月
青森県　笠原山不動院代表小笠原喜世様　九拾五萬三千円

平成九年一月
平泉町　一関信用金庫平泉支店　参萬円
一関市　山平様　参萬円
青森県　北山肇様　四萬円
衣川村　スキルグリスター代表取締役　千葉茂様　参拾六萬円
平泉町　川嶋印刷株式会社社長　菊地慶炬様　拾萬円
室根村　シニアーエンジニアリング様　参萬円
一関市　㈱精茶百年本舗　参萬円
栗原郡　㈲金盛工務店様　参萬円

平成九年七月
前橋市　㈱蜂巣労務管理事務所様　参萬円
藤沢市　矢鋪雅子様　参萬円

平成九年八月
一関市　有限会社松栄堂　参萬円

平成九年九月
大阪市　大都通信工業㈱様　参萬円
松島町　渡辺恭子様　参萬円

後記

▽中尊寺は、「金色堂國寶指定百年」の一年でした。

「写経」をその柱としたことによって、中尊寺がそもそも如法に写経するところから始まった山であったことを、寺の者があらためて実感した次第です。記念事業が自行になりました。

▽本誌を「國寶指定百年記念号」としました。一関・秋田・東京における五氏の記念講演から、本号には馬場あき子氏の講演を成稿して収め、また小西晫也氏には『金色堂修理報告書』に記載されなかった事柄を、記憶をたどって寄稿していただきました。

▽この一年、いや半年のあいだにも、世のなかでは実に次から次と、しかも、根底を揺るがすような事態も起こっております。

臓器移植法もそうですね。身体の資源化が懸念され、臓器提供者に限って脳死を死と認める。二つの死に抵抗感（毎日）、というよりも無理があります。多くの人がそう思っている。

医師や国によって、生死が定義されていいのだろうか（朝日）。いやその前に、病院という異界で死ぬことが普通になっている、死が日常生活から隠ぺいされてしまったような現実を、われわれ一人一人が自分の問題として考えてみる必要があるのではないか。

「それ、おかしい」と言うひとがいないのは奇怪しいわけです。

▽歳は私の後輩だが、出版社を辞めて帰ってきた慎宥君に、編集を手伝ってもらった。次号から私が彼の手伝いをすることにしたい。

〔佐々木邦世〕

中尊寺〈寺報〉『関山』第四号
金色堂國寶指定百年記念号
平成九年（一九九七）十二月十日
発行　中尊寺
（執事長　菅原光中）
〒029-41　岩手県平泉町字衣関二〇二
編集　中尊寺仏教文化研究所
印刷　川嶋印刷㈱

発行　中尊寺